
異世界に来たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

かちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に来たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

【Nコード】

N8258Y

【作者名】

かちん

【あらすじ】

裏でも表でも名の通る最強の殺人鬼集団・洞岳家。

その中でも最強と謳われている洞岳家長男・洞岳謙戯。

彼の殺人能力は「影質操作」。

今日、「絶対不可侵領域」の女・地獄院天音を殺すために、

謙戯は大刀洗山・闘技場に向かう。

奇襲を仕掛けようとしていた矢先に、彼は激しい頭痛に襲われ、意識を失う。

目が覚めるとそこは、ハイテクノロジー満載の世界。

——異世界だった。

その世界、謙戯が元居た世界のように、超能力や魔術が発達した世界ではなく、

科学技術の進歩により、「武装機械」と呼ばれるバトルスーツが開発された世界だった。

軍事力で世界の支配権を実質握っている企業・オーバーデッド社、そして、

オーバーデッド社壊滅を企み、世界平和を訴えるテロリスト・ジャステイス。

ひよんな事から、ジャステイスのテロに巻き込まれた謙戯は、彼らと共にテロ活動をすることを強要される。

そこから始まったのは——異世界と世界を巻き込む巨大な陰謀だった……。

※異世界トリップものですが、勇者ではありません。

完全に悪役に近い主人公です。

後にタイトル変えたいと思ってます。

序章（前書き）

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

序章

裏でも表でも名の通る殺人鬼集団がいる。

彼らの名は——洞岳家^{ほらおかけ}。誰もが知る、殺人一家だ。

表では、国際指名手配されるほどの知名度で、度々ニュースに上がることがあるが、毎度のことトップニュースを得ている。

しかし彼らが警察機関等にどうこうできるほど、優しいものではないぐらい、誰もが認知していることだった。

彼らはトリッキーな殺人を繰り返す。中には人間業とは思えない殺人手法もある。当然、マスコミは政府に圧力を掛けられ、そんな奇怪な殺人行動については一切報道してはいない。

裏でも表でも名の通る、と言ったが、そのとおり、裏でも名高い殺人鬼集団だ。

裏というのは世界の裏表の裏に位置する——一般人の知らない世界だ。

それは、人智を超えた存在だったり、架空と思われていた存在だったり。超能力や魔術といったものが関与しているといっても過言ではない世界だ。

洞岳家はその裏の世界に浸透しているが、暴れすぎて（殺しすぎて）一般市民にも知られるようになってしまったわけだ。

裏の世界で有名なのは実に簡単な事で——多くの殺人鬼集団がある裏世界で、最強と謳^{うた}われた集団だからだ。

どの殺人鬼も、洞岳家と聞けば恐怖し、憤怒する。

それは、自分達よりも「強い」という概念が、社会に染まってしまっているからである。

裏世界では、洞岳家を狙う者達が多い。しかしそれが無謀であると考えているものも多い。

そんな、最強と評価される洞岳家の中でも、最強と呼ばれている存在がいる。もっとも、この場合は世間ではなく、家族の中で、

と限定された話だが。

彼の名は――洞岳謙戯。ほらおかけんぎ

洞岳家長男にして、最強の殺人鬼である。

姉が三人、妹が四人、弟が二人、両親、といった大家族の中でも、それらすべてが最強の殺人鬼集団としての血を引いているのに、その中で最強と呼ばれているのだから、実質世界最強の人間であることは間違いない。

一八歳。一般的に高校三年生で受験シーズンという大変な時期の年頃の彼だが、殺人鬼であるから学校になど通っておらず、専業の殺し屋として金を手にしては食って寝て生きる、といった生活をしている。

今日、彼は一つの依頼を遂行中だった。

それは、殺人鬼集団序列七位と称される――地獄院家の一人・地獄院天音ごくいんあまねの抹殺、である。

今回、標的はボディガード四人を連れて、大刀洗山たちあらいざんを訪れる、という情報を手に入れたため、謙戯は単身でそこに乗り込み、地獄院天音を搜索中だった。

大刀洗山といえば、魍魎ちみもうりょうが渦巻くパワースポットとしては世間的に有名であるが、そんなことは嘘っぱちである。真実はというと、殺人鬼がやけに徘徊するという、魍魎も魍魎も関係ないものだ。徘徊する理由としては、修行場として使われていることが多い。自分特有の殺人手法を向上させるためというのが通常だ。

森林に溢れる大刀洗山だが、中心部だけは場違いな闘技場が建てられている。昔、殺人闘技場として使われていたという伝説が残っているが、その物語は表で公表されにくい醜い話である。政府のお偉いさんや、それ以上に権力を持つもの達の、鑑賞という名目の殺人ゲームだったのだ。

死刑囚と死刑囚同士のデスマッチが基本的だったのが、段々と一般人を巻き込んでいくものになっていき、そこに喝を入れたのが消下家という殺人鬼集団序列二位の者達だった。

そういうわけか、殺人鬼にとっては因縁深い、恨みの矛先でもある大刀洗山に潜入というのは、一殺人鬼の謙戯にとっては、少しばかり嫌気が差す任務だった。

目的は目標の抹殺。

それは簡単な事である。

地獄院天音という女の能力は『絶対不可侵領域』^{ぜったいふかしんりょういき}。所謂バリアのような物を作ること、自分自身へのあらゆる干渉を否定する力だ。人智を超えた能力。それこそが、殺人鬼としての特徴でもあるのだ。そんな大層な能力を持つ彼女が相手でも、洞岳謙戯にとっては苦戦すらないだろう。

故に彼は地獄院天音と一度対峙した過去があり、余裕で勝利を収めている。殺人鬼同士の誇りによる小さな喧嘩だったが、それでも実力が謙戯にあることに変わりはない。

天音が居るであろう中心部の闘技場に足を運ぶ謙戯は、段々と視界に入ってくる黒スーツの男たちの視線を避けながら、隠密に彼女へと近づいていった。

謙戯の行動は完璧だった。

立派な殺人鬼として、否、ここでは暗殺者と表現すべきか、彼は地獄院天音との距離を百メートルまで縮めた。

闘技場内部である。

観客席階層と思われる二階に身を潜める謙戯は、一階で白いコートの人々と会話を繰り返り広げる天音の姿をしっかりと見据えていた。白いワンピース姿に、白の長髪。美貌の姿に目がいつてしまうという現象もあり得るが、謙戯の場合は殺しの対象としか見えていない。「……なんだあの連中は」

此処に来て、初めて口にした謙戯は、地獄院天音と交渉らしきことをしている白コートの人々を見て、疑念を感じていた。

やがて、天音と白コートの間達の話が終わったのだろう、天音達は別々の方向へ歩き始めた。交渉か何かの終了だろう。謙戯は白コートの連中を怪しいとは少しばかり思いながらも、今回の目標

である地獄院天音を視界に捉え、しっかりと彼女のスキを待っていた。

彼女が《絶対不可侵領域》である以上、スキのない攻撃は全て「見えない壁」によって防御される。それは過去の対峙において経験したことだ。謙戯は彼女の《絶対不可侵領域》を打ち破る方法はただひとつとしか考えていない。

それは――能力発動前に殺す事。実に単純な事だった。

いわば奇襲だ。

そして、そのタイミングはやって来た。

地獄院天音が手に提げていたバッグから携帯電話を取り、耳に当てたその瞬間――

「――ッ」

謙戯は二階から飛び降り、そのまま一気に駆け出すと共に、周囲の床に映る「影」を手に纏い、その漆黒^{かげ}を槍のような形状に変え、地獄院天音の方向へそれを瞬時に伸ばした。

だがしかし、その攻撃行為と同時に、謙戯自身に大きな負荷が掛かった。

それは、能力使用によるリスクではない。

普通ならあり得ない現象だった。

「……ッなアッ!？」

激痛だった。

外部からではなく、内部からの痛みだ。

頭蓋骨が振動するようなものだった。

伸びていた「影」は地獄院天音の三メートル前で途切れ、虚空に消えた。

謙戯の腕に纏っていた漆黒^{かげ}は徐々に消えた。

天音は突然の事態に驚愕し、携帯電話を思わず手放してしまった。床に落ちた携帯電話の衝撃の響きは、謙戯の悲鳴でかき消された。

「うわあッああああああッ!！」

洞岳謙戯はその場でもがき苦しみながら、目標を殺そうという信

念のもの、必死に『影質操作』^{えいしつそうさ}を発揮しようとしていた。彼の能力であり、彼の存在価値。世界に存在する「影」を特殊物質として扱う力。

だがそんな最強の名の下に置かれている力も、今では発揮すらされなかった。

叫びを上げる謙戯は、原因不明の頭痛に苦しみ、そして最後には倒れた。

ただ、彼の遠くなっていく意識の中には、地獄院天音の動揺っぷりが理解出来るほど、彼女の声が慌ただしく聞こえていた。

「洞岳謙戯よ！ 私を殺そうとしてたみたい！ ……至急こっちに来て！ ……って、……あれ？」

携帯電話を拾い上げ、必死に電話越しの誰かに事情を説明していた天音だったが、いざ振り返って謙戯のもとを見てみると、

そこに、――彼の姿は無かった。

001 異世界トリップ／信号機で寝ていた男

パラレルワールド、と称するならば確かに”そこ”はパラレルワールドだ。

もっと近い言い方をするなら、異世界と呼ぶべきであろうその世界。

戦争が勃発していた過去を背負う現世界とは、全く異なる世界、それが異世界だ。

世界とは違う世界。

それはきつと、誰しも考えて、憧れて、行きたがっている世界のはずだ。

だがしかし、異世界などというお伽話の産物に、行く方法など存在しない。

しかし、彼は行ってしまった。

彼——洞岳謙戯は、行ってしまったのだ。

何かと、何かと、何かが合わさり、偶然にも、不幸にも——会社一つが世界を握る世界にと。

「あの、聞きました？ 信号機の上で爆睡してる人がいたって話」「は？」

路上を歩く二人の少女の足元には、矢印の点滅するコンクリートが敷かれている。通常の道路というのは、冷たいコンクリが平面に整理されただけの「道」だが、”異世界”の道路は、特殊加工された『ナビゲートグラス』を掛けることで、行き先までの案内役として、道路に目的地までの矢印が表示される。無論、道路自体に表示

されるのではなく、ガラスのレンズがモニター画面として使われているだけだ。最初の説明はやや合っていない。

最新のナビゲートグラス・王道参ヴァージョンを耳に掛けているのは、セーラー服を来たロングヘアの少女だ。

名前は統夏菜。おさむな

奇妙な話を持ちかけた少女だ。

それに対し、呆れた顔を見せたのが、グラスを掛けていない少女――勇梅終だ。いさめしゅう 長い髪を橙のリボンで纏め、右肩前に下げている。

こちらでもセーラー服を着ているが、夏菜と違ってベースカラーが白色である。夏菜の場合は藍色だ。

彼女たちの目的地は、自分達の住む学園寮だ。

「一体全体何がしたいのか分からない話ですよ。ただでさえオーバーデッド社が厳しい条例を出しているのに、交通機関に喧嘩売るような行為は刑務所行きですよ……」

夏菜は呆れたような顔を示しながら、グラスに表示された矢印通りに足を進める。

「信号機の上で寝たって……、今までにそんなことあったかしら」

「あるわけないですよ。テロリストでもそんな馬鹿みたいなことしませんし……」

「で、その馬鹿な奴は一体どのどいつなわけ？」

夏菜の隣を歩く終は、夏菜の進行方向に、従うように歩いている。

「それが『視覚検索』しかくけんさくでもヒットしない人物だそうで、データベースに住民登録してないとするなら、ホームレスですかね」

『視覚検索』というのは、その名の通り、見て調べる事。あらゆる場所に設置されてあるスキャンカメラが、道行く人々を映像で捉え、自動的にそれが誰なのか、どこに住んでいるのかをキャッチするシステムだ。

プライバシーに関して厳しいルールが強いられている現世界と違って、異世界では完全監視下の社会が浸透している。

データベースと呼ばれる全世界住民登録システムに登録されてあ

る人間ならば、スキャンカメラですぐに身元が割り出せるようになっており、防犯カメラや隠しカメラなどで、犯罪者の身元判明などの促進につながっている。現に犯罪率は低下の一方だ。

しかし先程夏菜が述べたように、ホームレス（家なし人間）や、テロリストなどはデータベースに登録されていないケースが多々あり、そこは問題点の一つとされている。

「信号機の上で寝る家無しがどこにいろのよ」

終は道先に建つ信号機を目にする。

夏菜もその信号機を見ながら応える。

「いませんよ」

「……でも居たんでしょ？」

「だからニュースになってるんですよ。オーバーデッド社もよっぽど驚いたんでしょうね、わざわざニュースに取り上げるんだから」

「で、そいつどうなったのよ？」

「オーバーデッド社の見廻組みまわりぐみに保護されたそうです」

見廻組とは、パトロール隊のことである。オーバーデッド社の警察機関管轄の組織だ。

「あっそ」

「……」

「最近はテロリストも活発で、馬鹿な連中が多いけど――その”アホ”も、テロリストと変わらないぐらい馬鹿よね」

終の言葉に、夏菜は苦笑いをする。

「アホで馬鹿、なんですね……」

信号機で寝るという行為自体は高難度だが、それをしようとする

勇氣はそれ以上のものだ。

第一に、信号機の上で寝るという考えが思いつくだろうか。面積の狭いあの空間で、睡眠という防御姿勢が全く取れない状態になるというのは、危険過ぎるものだ。

しかしそれをやってのけたという”アホ”とは一体どこの誰なのか。

データベースにも登録されず、無職で、所在不明というより所在無しの家なし人間、身元が完全に分からない人間——この世界には居ないはずの存在。

そう。信号機の上で寝るという大胆な睡眠行為をしたのは——ほら洞岳謙戯だ。おかけんぎ

「気づいたら信号機の上に居たって、言ってますけど」
こちらのせかい

現世界の取調室というのは、狭い一室で一对一もしくは数人対一の会話を成す場所だが、異世界の取調室は、やや広めで、多くのパソコンが設置されている。置かれてあるテーブルはタブレット端末付きテーブルで、タッチパネルで資料を使ったり、インターネットを使って検索が出来たりする。

そんなハイテクノロジー満載の取調室の外で、マジックミラーを通して部屋の中の人間を見つめる二人の男性が居た。一人は新人警察の中田。もう一人はベテランの中年親父・君平だ。両者とも黒のスーツを着用している。

中田は先程まで取調室で件の人間と取調を行っていた。A4サイズのタブレット端末を目にしながら、中田は君平に事情聴取の結果を述べていた。

「無意識のうちにやったなんてこと、この場合は考えられないですよ。なんせ信号機の上、ですからね。泥酔して全裸で公園で寝ていましたっつう無意識行動ならわかりますけど、無意識のうちに信号機登ってそこで寝るなんて事、まず考えられないですね」

中田はタブレット端末に目を通しながら、件の馬鹿らしさを溜め息として吐いた。

「そうだな」

君平はポケットから煙草を手に取り、火をつけようとライターをスーツポケットから探していたが、中田に「煙草はやめてください」と止められ、嫌な顔を見せると、仕方ない、と煙草とライターを戻した。

やや不機嫌そうな顔をしながら、君平は言う。

「あんな馬鹿は信号機から落ちて轢き殺されろってんだ」

「……それもまた大問題ですけど。しかしまあ、そうですね、あそこから落ちずに済んだってだけで奇跡ですよ」

「で、あの馬鹿野郎は他になんか言ってたか？」

「それが、妙な事ばかり言ってたよ」

中田はタブレット端末のタッチパネルに触れながら、それを君平に見せる。

「いちお彼の発言を文章化させましたが……」

「なにになに……、ここは何処だ？ 本当に日本なのか？ なんで車
が浮いている？ あの仮○ライダーみたいなのは何だ？ 俺はどう
してここにいる？ 地獄院天音はどうした？ お前らは誰だ？ ……
……なんだこりゃ、アイツは何言ってたんだ」

君平はマジックミラー越しにいる件の原因を見つめる。

「まるで記憶喪失者みたいですよ」

「いや、もしかすると偽ってるのかもしれない」

「と言いますと？」

「記憶喪失の振りして、罪から逃れようって感じじゃねーのか。オ
ーバーデッドの連中はかんかんに怒ってるらしいしな」

君平は溜め息を吐く。

「こんな面倒な事こっちに押し付けんじゃねーよ。あんな野郎さっ
さと刑務所行かせて、こっちは例の『ジャスティス』の仕事に戻ろ
うぜ」

「……と、言われましても……本人も結構困惑してるっすよ……」
過去のデータベース探ってもヒットしないし」

「ま、あとは任せた」

「あ、ちよつと先輩！」

君平は中田の肩を叩くと、そのまま去っていった。

残った中田は、ミラー越しの騒動の原因を見ながら、頭を掻きむしる。

「あーもうっ！ ……あいつ誰なんだよ」

マジックミラー越しにいる、一人の少年。

頬杖をつきながら、テーブルに設置されているタッチパネルがスクリーンセーバーに変わるのを見て、そこに表示された円を触ると、逆方向に動き出したのを見、驚きを見せると、それを使って暇を潰そうと考えた。

いわゆるタッチパネルゲーム、といったところだ。スクリーンセーバーがゲームアプリとなっているシステムで、こちらからのコントロールが出来ない代わりに、こうやって軽いゲームが出来るわけだ。

「……」

少年——洞岳謙戯は、遊びながら考えていた。

この部屋からの、脱出方法を。

地下街。

地上と地下、二つの街があるのが異世界の特徴である。

もとは空中鉄道開発成功に伴い、地下鉄道なるものを開発中だったものが、段々と企画が発展（暴走ともいえる）していき、地下街という第二の街が出来るようになってしまった。

当然大きなマイナス点も伴う形になったが、地下街ができて二〇年、今まで事故や自然災害が起こった試しは一度もない。それもこれも、大企業にして世界支配を行なっているモンスタービジネス・オーバーデッド社のおかげである。

地下街は正式な区域別はされておらず、地下街全てが地下街と称されている。細かな分け方はされているが、実際その活用はされていない。

ODP東支部（オーバーデッド管轄警察機関東支部）、その真下には地下街最大級のショッピングモールがある。

何故ODP東支部という犯罪者の集まる建物の真下に作られたのかというと、これはオーバーデッド社の信頼と安心の掴むための策に過ぎない。すぐ近くに犯罪者がいるショッピングモールだが、絶対の安心安全を保証するというオーバーデッド社のキャッチコピーに、当初は非難殺到だったが、二〇年もして全く被害が出ていないという歴史から、オーバーデッド社は完璧な安心を届けてくれると、絶対の信頼を、市民からつかんだ、という会社の思惑通りに事が運んだわけだ。

そんな地下街ショッピングモールの片隅で、営業停止となったファミリーストランがある。

外装はマシなものだが、中身はめちゃくちゃで、テーブルも椅子もキッチン用具もなにもかも、交ぜこぜに散らばっている。要因として過去にこの場所で起こった喧嘩の所為だが、それにしても被害が大きすぎる。

今では誰も使っていないこの場所に、居る筈のない人間が居る、というのはおかしくはない。

テロリストにとって、『視覚検索』から外された用済みのファミリーストランは、最高の場なわけだ。

テロリスト——ジャステイス。

世界転覆を狙うテロ組織。彼らは「世界平和」の為に、テロ活動を起こしている。

過去に、三度のテロを行い、いずれも成功しているが、世界に何ら影響は与えていない。言うなれば、成功ではなく失敗なのかもしれないが、一部の人間達からは英雄視されている面もあり、それらが彼らの活動源でもある。もちろん、それが全てというわけではない。個々の意志によって動いているのが、九割である。

国際的に有名なジャステイスは、オーバーデッド社の使う『武装機械』と呼ばれる軍事兵器の中でも最先端の技術を誇る『バトルスーツ』を駆使するといった、世界に喧嘩を売る行いと共に、そのバトルスーツの性能を生かした無茶苦茶なテロを行う。

武装機械とは、現世界に存在する戦車や戦闘機といったものとは全く違い、――人間自身が軍事兵器と成るものだ。例えば、腕につけるランチャー砲だったり、レールガンだったり、足につける加速^{アクセル}機^{マシン}だったり、背中につける飛行エンジンだったり、多種多様の武装機械が存在する。

中でも卓越した技術を持つのが、全身武装――バトルスーツだ。オーバーデッド社独占のバトルスーツ開発が、実質世界の支配権を握ったといっても過言ではない。それほどバトルスーツの強力さは危ぶまれているのだ。

そんな最高峰の軍事力を持つジャステイスは、今日、四度目のテロ行為を予定していた。

その為、ODP東支部の真下に位置するショッピングモールの中でも監視下に置かれていない廃墟――営業停止となったファミリーレストランに拠点を置いているわけだ。

その中の、キッチンと呼ばれていた場所で、ジャステイスの一部は最後の確認を行っていた。

「いよいよ、決行の時だ」

碧眼に黒髪。クォーターの雰囲気を見せる青年・レイが言った。防弾加工の黒いコートを着用し、右手にタブレット端末を手にしている。また、右耳にイヤホンマイクも装備している。

彼の発言を聞いて、周りに居た一五人の人間が一斉に頷いた。

「奇襲班、準備は整ったか？」

レイの言葉はその場にいる一五人に向けた言葉ではなく、マイク越しにいる一人の人間への言葉だった。

そのとおり、イヤホンからは女性の声が聞こえた。

『準備バッチリ、OKよッ！』

「了解した」

レイは周囲の人間たちに言う。

「全ての準備は整った。皆、今回のミッションが今までとは格段に違い、そして異質なものであることを忘れるな。……グレイス！ 今回の目的はなんだ？」

レイは、黒縁メガネを掛けた長身にして細身の男に問いかけた。

グレイスと呼ばれたその男は、

「ODP東支部の安心安全を損なう結果を出すためのテロ行為、という名目下に置かれるバトルスーツの補給及びジャステイスの一員であり尋問を受けている我らの同胞——マリア奪還です」

と、今回のテロの目的を正確に答えた。

レイは感心したかのように頷き、そして周囲に目を向ける。

「皆！ 東支部は今までとは違い、完全にオーバーデッド社に染まっている。バトルスーツの大量出動が予想されるが、それに怯えず、堂々と行動することだ。今まさに恐怖しているものは帰ってもいい。役立たずを背負うのは御免だ」

レイの言葉の後に、その場を立ち去ったものは一人も居なかった。ジャステイスのメンバー全員が、強い意志を持っていることが分かる。

レイは少し笑顔を見せると、額に流れた汗を手で拭き取り、静かに宣言した。

「目的を達成させよう」

周囲の一五人は首を縦に振り、イヤホン越しにいる奇襲班の一員も、威勢の良い返事をした。

ジャステイス——テロ組織。

バトルスーツという脅威を持った彼らは、動き始める。

002 怪奇ブラック／そして正義がテロリズム

「もし仮に、君がね、この世界の知識なんにも知らないとしてもだよ。悪いことしたらダメってことぐらい、解ってるよね？」

と、まるで小学生を相手にしたかのような言動をとる中田は、自分でも少々呆れ気味だった。

取調室で、中田から聴取を受けている洞岳謙戯は、腕組をしながら真剣な表情で対応していた。

「ええまあ、解りますけど、ていうか本業がもう悪いことなんですけど」

「え？ なに？」

謙戯の職業は殺し屋である。悪い事という認識ぐらい赤ん坊の頃からしているのだろう。

中田は謙戯の戯言をきちんと聞き取れなかったらしい。

「で、解ってる？ 君がしでかしたこと。交通法違反だからね。信号機っていうのは、交通機関のマナーそのものなんだから。それを侵害・侮辱したっていうのは、罪、大きいよ」

「それこそ心外だなあ。俺は信号機を侵害・侮辱したつもりなんて無いですよ。故に、何故俺があんなところで寝なくちゃいけないんですか。馬鹿でもあんなところで寝ませんよ」

「だから、君が馬鹿だから言ってるの」

「……刑事さん、無意識のうちにあそこで寝る、なんて事出来ますか？」

「できないよね。だから訊いてんの。なんでわざわざ喧嘩売るような真似したのって！」

中田は段々と限界に近づいているようだった。

相手がとぼけているのも無理ない。なにせ謙戯自身、身に覚えがないからだ。無意識のうちにやった、という枠におさまるレベルではない。

「そもそも、俺はある人を探していて、見つけたからその人のもとへ向かおうとしたら、そこからの記憶が消えてるんです。で、気づけば信号機の上でだし、見たことないものばかりだし……。まるでSF映画みたいですよ此処」

謙戯が若干の嘘が混じった説明をしたように、地獄院天音を殺そうとした瞬間に意識を失い、気づけば信号機の上に居たという、どういふ紆余曲折があったのか定かではない現状に勝手に放り込まれてしまっていたわけだ。

「……君、学生？ その黒いコート、制服じゃないみたいだし……でも成年じゃないよね？」

中田は唐突に尋ねてきた。

「一八歳です。高校は休みなんです今日は」

洞岳謙戯は高校に通ってはいない殺人業をやっている以上、公の場に顔を見せることは絶対ない。

「こうこう？ なにそれ？」

だが、中田の返答は疑問形だった。

高校の存在をまるで知らないような物言いだった。

「……高校、って、高校のことですけど」

「……そういう学園施設もあるんだね。俺あんま分かんねーや。……まあ、良いとして。てか、どうしよかつなあ。……いやあ、本当にこれ困ったなあ」

中田は頭を掻きながら、テーブルに置かれたタブレット端末を見つめる。

そこに表示されていたのは、洞岳謙戯の起こした騒動に関する、目撃情報と、その時の映像だった。

「あの、刑事さん」

「……？」

中田は目だけを謙戯に向けた。

「洞岳家って知ってます？」

「洞岳って、君の苗字でしょ？」

「……………」

謙戯は首を傾げた。そして妙に気味の悪い笑みを見せた。

「とぼけてるんですか？」

「なにがだよ。ていうかそれはこっちの台詞だし」

タブレット端末を見ながら中田は愚痴をこぼす。

しかし謙戯は、ますます気味の悪い雰囲気醸しだしてくる。

（こいつはとぼけて喧嘩でも売ってるのか……。それとも本当に俺の事を知らねーのか。……冷静に考えてみれば、こいつはおかしいし日本もおかしい。空飛ぶ車なんていつ開発されたんだって話になるわな。……もしかして俺は未来にでもタイムスリップしたのか？
ますますあり得ないな）

謙戯が洞岳家を知ってるかどうか問いかけた理由はこうだ。

事情聴取の際に名前を問われた際、洞岳と名乗っても何の疑いも、ましてや驚きもされなかった警察達にまず疑問を持った。そして改めて「洞岳家って知ってます？」と確認してみれば、普通の返答が来るだけの始末だったわけだ。つまり、裏の世界でも表の世界でも有名な洞岳家を、警察たちが耳にすれば驚愕し恐怖し逮捕させようとやけになることは間違いないのにもかかわらず、此処ではスルーされるばかりなのだ。

洞岳家を知らないとなると、この世界に何らかの変化が起こったのか、もしくは日本に似たどこかなのか、という疑念が生じるが、謙戯は、街景や機械のシステムが記憶している世界と全く違うことから察するに、タイムスリップしたのではないかという結論に至ったのだ。

しかし実際は、異世界に転移しただけである。それだけ、と表現するのはおかしいが、世界から別世界に移っただけで、時間跳躍をしたわけではない。

謙戯が考えている間に、中田は何度も声を掛けていたが、謙戯自身は自分の身に起こっている出来事に思考を働かせ、外部からの干渉は全く受け付けようとしなかった。

だが、それから一分と経たずに、事態は急変する。

「本当に刑事さんが洞岳家の存在を認知してな————ッ!？」

轟音が鳴り響いた。

謙戯の語りを遮ったのは、とてつもない轟音と、それから、地震のような強大な揺れだった。

「なに!？ 何何何何!？」

突然の出来事だった。地震のような、そうではないような。まるで何かがこの建物自体に突進しているような衝撃だった。激しい揺れが延々と続いていた。

冷静な謙戯に比べ、中田はかなり焦っていた。思わずタブレット端末を手放し、それすら気に止めず、揺れる建物に心配していた。というより、死ぬではないのかという恐怖が芽生え始め、それに怯えていたのだ。

揺れが続く。

揺れ、揺れ、揺れる。

謙戯は腕組し椅子に座りながら、事の唐突さに疑問を感じていた。

「地震じゃあない。これは人為的な揺れだ」

「え!？ 地震じゃないの!？」

思わず中田は口にした。冷静さを保つ謙戯が大人に見えたのか、地震ではないと聞いて少しばかり安堵の顔を見せるも、すぐさま揺れが起ると顔を引きつらせた。

「下だ」

謙戯は床を見つめた。

「ここ、何階ですか？」

「八階だよ！それがどうしたの!？」

「危ない。倒壊するかもしれない」

「ええっ!？」

中田の焦りは異常だった。おそらく謙戯の非常時に対する対応が冷静すぎるために、中田の困惑ぶりが大きく見えるのだろう。

すると、謙戯はさっと立ち上がり、中田を見据えてこう言う。

「俺は逃げます。死なないように頑張ってください」

謙戯は鍵のかかった出入り口の方へ足を進めた。

中田は謙戯を止めようと動くが、丁度揺れが起こり、動きを止めてしまった。

「ダメダメダメ！ 勝手に動かないで！」

それに、と中田は内心で呟く。

（ドアには鍵が掛かっているし、ロックの解除はブレインコンピュータールームでしか出来ないから、逃げようたって無理なことなんだよ。俺達ここで死ぬ運命なのかもな……）

揺れは激しさを増していた。同時に、サイレンが鳴り響く。

放送アナウンスが流れ始めたが、内容は原因不明の揺れによるもの、といったなんとも曖昧なものだった。

中田は溜め息を吐いて、テーブルの脚にしがみつき、

そして、謙戯の方へ振り向いた。

「……………え？」

そこにあったのは——黒い何か。

まるで”影”のようなそれは、洞岳謙戯の腕に絡むようにくねくねと動き、拳句の果てには彼の腕が上から下へと無造作に振り下ろされてみれば、その”黒い何か”がドアへと伸び、ドアを——破壊した。

まるで、一つの刀によって斬り壊されるように。

謙戯の腕に纏う黒いそれは——影。

彼の力・影質操作によって、周囲の影を特殊な物質として扱う能力だ。

謙戯は驚愕している中田の方へ首を捻り、笑う。

「お先に」

洞岳謙戯はその部屋から去っていった。

残された中田は、啞然としていた。

「……………なに、今の」

ODP東支部の建物のみが揺れていた。

不可思議な現象とはいわない。単なる物理的攻撃によるものだからだ。

上層五〇階と地下二階で構造されているODP東支部のビルに、一機のバトルスーツが攻撃を繰り返していた。

そのバトルスーツは『カテンミナツキ華天水無月』。

メタリックブルーが光り輝く、細身の体型をしたバトルスーツだ。頭部は猫の耳をモチーフにしたもののような二つの三角形が両耳付近に備わっている。黄色い目をした華天水無月はスピード重視だ。

だが、機体の繰り出す打撃によって、耐震強度の高い特殊仕様のビルが、簡単に揺れてしまう理由は、華天水無月の特殊仕様にある。アクセルウェーブ『一点集中加速連動波』だ。

機体から発する振動波を一点に集中し、瞬間的な速さで連続的に振動波を繰り出す事で、微弱の力が一気に強大になる。

打撃が弱い華天水無月ならではの、速さを生かしたアタックの補助。

一秒で数十回ものパンチを繰り出す華天水無月のスピードは、恐らくバトルスーツ内では最速だろう。

しかし、このバトルスーツを操る人間の体力に限界があるため、使用時間は一〇分と短い。

しかしこの一〇分が、――テロリスト・ジャステイスにとっては非常に有り難いものであることは確かなのだ。

『その調子だ。あと少して起爆準備が整う。それまでの辛抱だ』

バトルスーツ内の音声通信システムから、男の声が通ってきた。バトルスーツを着用している人間は、

「大丈夫！ 全然行ける！！」

と体力に余裕を見せた。

華天水無月を着用しているのは、咲夜^{さくや}という一八歳の少女だ。彼女もまたジャステイスの一員で、彼女なりの思想を持っており、その願いを叶える為に、ジャステイスというテロ組織に入る事でより一層近くなるのだ。その為、一八歳という年齢の少女でさえ、こうして軍事兵器を見に纏い、テロを行う。

機体を操るのが少女とは思えない。

しかし、バトルスーツが未成年の少女でも操れるということが証明されている。

もちろん、咲夜はきちんとした体力補強をしている。

アクセルウェーブ

『一点集中加速連動波』を使いこなせる要因はそこにあるのだろう。

ビルの壁にヒビは入らないが、確かに揺れている。

地上からの攻撃は、確かに効いていた。マスコミがバトルスーツに注目し始めたのは、攻撃開始から一分も経たなかった。

やがて警察機関が出勤する。

その時――

激しい轟音がビルを中心として、この都市全体に響き渡る。

爆発が起きたのだ。

003 赤色ストロング／朱雀百華、後に殺人鬼

テロ組織・ジャステイスによる地上の攻撃が、テロの終わりではなかった。

オーバーデッド社管轄の特別警察機関所属の『バビロン』が出動し、地上の警備を固める一方で、過去に度々目撃されているバトルスーツとの抗争も交えていた。

バビロンは敵のバトルスーツが華天水無月であることをデータベースから確認すると、カテンミナツキ華天水無月の弱点を生かした攻撃に変更した。バビロンの思惑通り、華天水無月は五分後にはショート寸前にまで追い込まれてしまい、華天水無月の装着者・咲夜は命からがらバビロンから逃げることに成功した。

警察からすればテロは防ぐことは出来なかったが失敗することは出来ただろうと、早とちりをしていた。それは油断によるやつてはならない決断だった。

まさか、地下からの攻撃が残っているとは知らなかったのだ。

そう、地上での華天水無月による攻撃はフェイク。真の目的は絶対安全と評価された地下街・ショッピングモールからの攻撃。それによりオーバーデッド社の信頼を損なうことが目的だが、それは名目でしかない。実際はそこからのバトルスーツ補充、そして、ジャステイスメンバー・マリアの救出だ。

ODP東支部の真下からの攻撃は、雑だった。

ロケットランチャー（RPG）を三発打ち、地下街に警報を鳴らす。さすがオーバーデッド社といったところか、RPG三発では地上は揺れもしなかった。特殊加工された何らかの壁が、地上と地下を防いでいるのだろう。

しかし警報を鳴らすことで地下街の人間たちはパニックを起こす。そこでまず安全を損なわせたのだ。

次に、随分前からしかけていたC4の起爆を開始した。

二〇個以上に及ぶ爆弾が爆破されると、地上にあるODP東支部のビルの床に穴が空いた。

ジャステイスはそこから乗り込み、一気に施設の占拠を成そうとしていた――だが、

浅はかなテロリストたちは、自分達の行為が敵に丸見えだったことに気付かされる。

「……やられた」

ジャステイスのリーダー・レイが呟く。

強度な耐震性を誇るこのビルだからこそか、何十もの兵器をしようとしても倒壊することはない。

だが、一階フロアが爆破の影響で原型を成してなくなっていた。

天井は無傷でも、床はところどころ穴があいている。

その僅かな地形に立っているレイと、その仲間達は、危機的状况に陥っていた。

白いロングコートを着た、特殊警察機関所属・バビロンの防衛隊数百名に、囲まれていたのだ。

中には、五機のバトルスーツも含まれている。

その中でもひととき目立った赤色のボディを持つバトルスーツもいた。

「作戦はうまくいっていた。……いや、行き過ぎていたのか？」

レイは舌打ちをして、銃を持って囲むバビロンを睨む。

隣のグレイスが、機関銃を周囲に向かって構えながら、冷静に応える。

「敵に作戦が漏れることはありません。奴ら、地下からの攻撃を予測していたのか、或いはそれにも対応出来るようにしていたのか」

「両者にしても、ここまで早く対応されるとは思っていなかった。

バトルスーツの出動には四〇分以上は掛かる。それなのに何故こんなに早く……？ 生身の人間だけならやってのけたが、五機もあるとなると」

レイの目に映るのは、赤色のベースカラーをしたバトルスーツだ

った。

尖った頭部を持ち、両肩はやけに武装されたバトルスーツだ。あんなものを見たことはない。諜報部員からの情報でも、真っ赤な機体のバトルスーツは二、三機ほど確認していたが、しかしそれでもあそこに立っているバトルスーツは初めて見るものだった。

只ならぬ気配を、レイは感じていた。

もしも仮に、あの赤い機体によってテロが上手く運ばなかったとすれば、かなりの厄介ということになる。そう断定せざるを得ないだろう。あれが新型のバトルスーツであり、高性能スペックによって出動時間短縮という弱点を補う事がされていたとすれば、合点がつく。

だが、もしそうだった場合、最悪のケースということになる。いわば、厄介にして最悪のバトルスーツを、相手取ってしまったというわけだ。

額から流れ落ちる冷や汗が、やけに肌で感じる。これほどまでに汗は冷たかったのか、と思うほどのものだった。それほどレイは緊張感と焦りを抱いているのだ。

「咲夜」

レイはイヤホンマイクを起動した。

『すみませんリーダー。……………見たことないバトルスーツが……………イヤホンから聞こえる少女・咲夜の声は、苦痛が混じったような辛そうなものだった。』

「…………オーバーデッドの新たなバトルスーツか。だったら出動時間が短縮されている可能性もありえる。それに、”あの赤色”…………確かにあんなもの、見たことがない」

『それです。赤色のボディでした。…………それに、——空を飛びました』

「…………なんだと!?!」

レイが驚くのも無理ない。

今まで造られてきたバトルスーツの中で、空を飛ぶバトルスーツ

など、なかったからだ。

オーバードッド社によれば、長時間の跳躍や空中浮遊は不可能とされてきた。

だが咲夜の言葉が真実なら、新開発によってそれらも可能となったのだろう。

先ほどのレイの予想はほぼ当たっているに違いない。

オーバードッド社の新型バトルスーツならば、空中浮遊も可能になっているだろうし、出動時間短縮も可能だろう。今回のテロが上手く行かず、最悪な事態と化したのは、おそらく全ての原因にこの“赤色のバトルスーツ”が当てはまる。

「ジャステイスの諸君——！」

拡声器越しの男の声が響いた。一斉にジャステイスの面々はそちらに顔を向けた。

そこに居たのは、赤色のボディを持ったバトルスーツだった。

おそらくバトルスーツに装備された拡声器を通して、装着者が話しているのだろう。その語調からして、かなりの余裕が感じられる。

「予想外の出来事に困惑しているようだね。残念だが、こちらは予想内の事で退屈だよ」

レイは眉をひそめる。

「どういうことだ？」

「どうもこうもない。君達テロリストのすることは手に取るように分かる。地下街に拠点を作って、念を押してテロを計画していたようだが、スキャンカメラでお見通しだ」

「そんなはずはない。あそこのスキャンカメラは起動されていない。こちらのハッカーが要チェックしている」

「君達はどうやら『視覚検索』しか確認していないようだね」

赤のバトルスーツの言葉に、レイは焦りを感じた。

「サーモグラフィだよ、サーモグラフィ。あのカメラの機能は——あるんだ。君達はその中の一つをただ確認しただけに過ぎない。そのまた一つの機能・盗聴を駆使して、我々は君達の計画を全て、こ

の耳でじつくりと聴いていたのさ」

つまり、ジャステイスの隠れ拠点だった廃墟レストランは、最初からオーバーデッド社に監視されていたわけだ。しかしジャステイス側もスキャンカメラの対策はしっかりと行っていた。だが、無知だったのだ。スキャンカメラの性能がなにも視覚検索だけではないことを知らなかったのだ。

全てが全て、完全にオーバーデッド社が上をいていた。

ジャステイスは遊ばれていた。

「……」

「まんまとやられましたね」

グレイスは冷や汗を掻きながら、目を閉じる。

（初歩的なミスじゃないか……！）

憤怒を感じたレイは、握りこぶしを作ったまま、その場に立ち尽くした。

「世界を握るオーバーデッド社相手に、万にも達していないテロリスト共が、勝利をつかめるとでも？ それに、今まで君達が行ってきたテロ行為も、全て把握済みでした。いちお、成功させてあげましたけど、今回ばかりはそうはいきません。何故成功させたか？ 簡単ですよ。――日本に活気を生む為です。ほら、よくあるでしょう。犯罪者が増えれば民間人の警戒心も変わる。ウイルスが蔓延すればマスクをつけたり帰ったら手洗いうがいしたり、と。人間、危機的状況に遭遇しないと進歩しませんからね。適度な刺激っていうものも必要不可欠なんですよ。ジャステイス、君達は自分達が世界を相手取る事が出来る凄いテロ組織とでも勘違いしているのですよ。うが、生憎、我々は君達などはなから眼中にありません。使える道具の一つですよ。……まあ、安心安全の地下街を脅かすといわれればさすがに対応せねばいけませんし。それに、我々の武装機械を奪うなど百年早い。まあ、最終的に――マリア・キャンシー人造人間を手放すわけにはいきませんので」

「マリアを返せ！」

怒鳴り声を上げたのは、ジャスティスの一人で、短髪の男・正造^{しょうぞう}だった。

感情的になった彼に、すぐさま歯止めを掛けるのはレイだ。

「黙れ。……正造」

レイもひたすら我慢していたのだ。そのマリアという人物に対する強い感情を、自ら抑制している。それでも、溢れてしまう憤怒の感情が、彼の判断能力と現状理解の進展を鈍らせる要因ともなっている。

「……………！ くそつたれ！！」

正造は拳を太腿にぶつけた。必死に我慢しても、物理的に何か起こさないと気が済まなかったのか、自らにダメージを与えて落ち着こうとしている努力が見えた。

しかし、次に放たれた敵の言葉に、レイを含むジャスティスメンバーは一気に顔色を変える。

「大切な仲間を助けたい気持ちは解りますが、私からすれば君達は、自らの力となる『兵器』を早く手中に戻したいだけに見えますよ」

赤のバトルスーツは、^{あざけ}嘲るように言った。

「貴様……………」

「ジャスティスなんてそんなネーミングセンス、やめてくださいよテロリストさん。正義を飾るのは我々、オーバーデッド社であり、それ以外は皆『悪』なのですから。人類皆悪です。悪。しかし我々は正義です。強者の語りは——絶対の正義ですから」

堪忍袋の緒が切れたレイは、手に持っていたマシンガンをすぐさま赤のバトルスーツへと構えた。同時に他のメンバーたちも四方八方に銃口を向けた。

「その行為は無意味です」

赤のバトルスーツは、一步踏み出した。

「この『朱雀百華』^{スザクヒヤッカ}はオーバーデッド社新開発のバトルスーツ。言うならば、最強のバトルスーツなんですよ」

そして、次に踏み出した一步は地を踏むことなく、床のない宙に

たどり着いた。本来ならばそのまま落下するはずの機体が落ちることなく、空中で静止しているのだ。

「そして、空中浮遊も possible の、新たなバトルスーツ。百華シリーズ第一号なのだから!!」

両肩に設置された高機能エンジンにより、機体が浮遊出来るようになっていく。

これはバトルスーツの進化というより、エンジンの進化だ。

そして、先ほどの朱雀百華の言葉が、戦闘開始の合図となった。バビロンの人間たちは、様々な武装機械を駆使し始めた。しかしそれらは全て攻撃するものではなかった。そのひとつ、磁力制御システム搭載の『マグネットボール』は、ジャスティス達の銃火器全てを磁力によって吸い込むように捕らえた。他にも多々の武器があったが、ジャスティスを襲撃する類ではない。恐らく攻撃的武器として用意されているのは、バトルスーツ五機ということだろう。

武器をなくしたジャスティス達は驚愕し、そして絶望し、最後には呆然としていた。

「舐めていた……」

レイがつぶやいた。

（俺達は世界を舐めていた。そうだ——たかがテロ組織一つ相手に、オーバーデッドが傾くわけがない。客観的に考えていたつもりだが、結局は自惚れていたのか……）

テロ行為が成功に収まっていた過去を見て、自分達なら革命でもなんでも起こせると錯覚していたレイは、死ぬ事を恐れ、身震いし始めた。

「くそ！ これで終わりなのか！ ——！！？」

レイが叫んだその時、一階フロアの天井付近の窓が勢い良く割れた。

窓から飛び込んできたのは、青のボディを持ったバトルスーツ——華天水無月だった。

加速された動きで、一気に床に着地した。

「咲夜！」

『任せて!!』

華天水無月は得意の加速システムを使い、瞬間にバビロンの武器を奪い取っていった。半数以上の武器を奪った華天水無月だったが、マグネットボールを奪うことは出来ず、逆にその磁力によって動きが鈍くなってしまった。

華天水無月の装着者・咲夜もこれには驚き、自らが活躍出来ると思っていた数秒前を悔やむと共に、現に今危機に追い込まれている事にやや焦りを覚えた。

「飛んで火にいる夏の虫、という言葉を送る価値もない。華天水無月のスペックを十分に生かしていませんね」

朱雀百華はそう言い、右の掌を広げそれを華天水無月に向ける。掌の中心から光が輝きだすと、直後そこから青白い光線が放たれた。その光線は一直線に伸び、華天水無月の左肩部分に激突した。

「つつつぐツツ!!」

オーバーデッド社開発のバトルスーツ・華天水無月であっても、最新の朱雀百華のただの光線攻撃だけに、左肩の損傷及び片腕の機能を破壊されてしまった。

光線を受けた反動で華天水無月の機体が後方に飛んだ。おかげでマグネットボールからは離れたが、すぐさま磁力制御システムを起動しようとバビロンの一人が動き出そうとした。

その時だった。

「すみません。出入り口って向こうの原型とどめてないアレですかね？ だったらここ通りたいんですけど」

男の声だった。その声はまるで場違いだった。緊迫感のない、日常性の含んだ言葉の内容。唐突のそれに、ジャステイスも驚き、バビロンも驚いた。

マグネットボールを持つバビロンメンバーの背後に立っているその男は、まるで緊張した表情も見せず、「あの一」と問いかけるばかりだった。

「なんだね君は！」

マグネットボールの所持者が怒号に似た疑問を投げかけた。

「俺ですか？ ただの一般市民ですけど」

その男は首を傾げながら答えた。

しかし男の言葉は、見るからにして嘘っぱちだと、誰もが分かるようなものだった。

何も感じられない言葉、というべきか、空っぽの言葉というべきか。

まるで、言う必要もないただの言葉を発音しただけに過ぎないよな。この男、別段出入り口に行きたいわけではなく、ただ声を掛ける為だけに言葉を発したようである。

一方で朱雀百華の装着者は、近くにいいメンバーに指示を出していた。突如現れたその男を殺せ、というシンプルな命令だった。朱雀百華の狙いは、これ以上面倒を巻き込まない為に迅速な対応をすべきという、この場のバビロンメンバーにおける実質的リーダーの素振りを見せるようなものだ。

素直に指示を受けたバビロンの一人は、すぐさま手に持つサブマシンガンの銃口を男に向けた。

そして、容赦なく引き金を引いた。

弾道は一直線にその男の頭に向かっていった。だが、男は倒れることもなく、血を流すこともなく、ましてや撃たれた外傷もないまま、首を傾げていた。

ただ、弾丸が頭に当たる直前に、“黒い何か”が彼の頭の目の前を横切るようにして現れたように、朱雀百華は思えたのか、首を傾けていた。

「危ないなあ。弾があたって死んだらどうするんですか？」

件のその男は、不気味な笑みを見せると同時に、ギロリとマグネットボールの所持者を睨んだ。

そして言う。

「危うく殺されるとこだった」

“影”が伸びる。男の周囲に広がる薄い影が、一気にどす黒い黒色の影に変色し、男の腕に絡みつく。

それは瞬間の出来事で、直後に男は影の巻きついた右腕をマグネットボール所持者の頭に向かって突き出した。

無音の中、マグネットボール所持者の頭には、男の“黒い手”が突き刺さっていた。そこからは赤い血が流れ、ぽつりと床に落ちていく。

男は頭に突き刺した右腕を引っこ抜き、マグネットボール所持者が床に倒れていく途中に、その身体を蹴った。蹴られた身体は穴へと落ちて行く。容赦なかった。およそ常人がする行為ではない。

朱雀百華も、ジャスティスも、目を見開いていた。

そして、男は楽しさという感情の含まれていない笑みを浮かべて言う。

「憂さ晴らしだ」

男の名は――洞岳謙戯。

004 黒闇イリュージョン／それは影

「ジャスティスの連中は全て此処に囲んだはずなのですが、どうやらまだ一人、逃れていた鼠がいたようですね」

朱雀百華は嘲るように言葉にした。

しかしその態度は、単に馬鹿にしているつもりではない。同胞であるバビロンのメンバー一人が、目の前で残酷な殺され方をしたのだから、感情的にならないわけではない。一見冷酷そうに見えるこの者だが、しっかりと仲間たちの事思う人種でもあった。

だがこうして冷静な対応を見せるのは、ポーカーフュイスを気取ることで相手の流れに流されないことが狙いだ。もとより朱雀百華スザクヒヤッカの装着者の顔など見えてはいないが。

一方でジャスティスリーダーのレイは、突如現れた男には全く見覚えがなかった。

「誰だあいつは……」

隣のグレイスに確認をとっても答えは「分からない」。自分達の仲間であることは絶対がない。これらにより彼がジャスティスメンバーでもなく、バビロンメンバーでもないことが、レイは理解した。その男――洞岳謙戯ほらおか けんぎは、もちろん両者の一員ではない。

れっきとした殺人鬼集団の一人なのだ。

「その赤色。なんだか勘違いしてるようだぜ」

と、謙戯は余裕のある表情を見せながら、朱雀百華を馬鹿にした。「俺が、そこで猫に睨まれた鼠みたいにくすぐまってる奴らの仲間とでも言うか。残念だったなあ、仲間どころか今初めて出会った連中だよ」

「……………どちらにせよ、君が我々の邪魔をする者という認識は出ていますよ」

仲間一人殺した、という時点で、朱雀百華にとっては敵、バビロンにとっては犯罪者だ。

「心外だなあ。俺がいつ貴方達の邪魔をするって言ったんだよ。ただ此処から出ていきたいだけなんですよ」

「出口を抜け出すために、人一人の命を犠牲にする必要があったのか？」

「偽善っぽい言い方はやめてくれよ。俺からすれば貴方達の方がよっぽど悪役だぜ」

「質問に答えてください、君は、何故、その者を殺したのですか？」
朱雀百華の声色が変わりはなかった。だが、内心に秘められた憤怒の感情が徐々に増している事に違いはなかった。

謙戯は少し沈黙を作り、妙に考えたようなわざとらしい振りを見せて、答える。

「専業」

「はあ？」

冷静沈着な朱雀百華の装着者でも、素っ頓狂な声を出してしまった。

「真面目な答えですよ。人殺しが家業であり本業であり専業だ。最も、無意味な殺人は嫌うタイプですよ」

謙戯は、穴の下深くを見つめた。おそらく穴の奥に倒れているだろう死体を眺めているつもりだったが、暗闇に消えた死体を目で確認することは無理だった。

それでも、本当にわざとらしい素振りですれ続けながら謙戯は言う。

「先ほどの男性を殺したのは、あの鉄球みたいなもので僕を殴り殺そうとしている”殺気”を感じ取ったんですよ。ただまあ、あれが撲殺用の武器とは思えねーが」

謙戯の言うとおり、その鉄球みたいなものとはマグネットボールだ。

マグネットボールを持っていた男は、おそらく、殺されなかったら、その後謙戯をそれで殴り掛かっていただろう。磁力制御システムしか能のないマグネットボールだが、物質は固い金属なのだから、

その攻撃方法も一理あると見込んだのだ。

「だから刺し殺したんです」

「……刺し、殺した、ねえ」

（手で殺す、それを刺し殺したと表現する。……ジャスティスのメンバーであるとするれば、非常に厄介な者を入れ込んだものだ。だが本人が違うと明言している以上、その可能性は低い。だったら、奴はなんだ？ この場にはジャスティスと、………奴がバビロンという可能性は？ ……いや、あるはずがない。だとすれば……第三者か？ ますます意味が分からない）

謙戯の正体を掴めない朱雀百華は、困惑していた。

ジャスティスでもなくバビロンでもない。

未知なる敵へどう対処すべきなのか。

「まあ、君がよほどの阿呆であることは分かったよ」

「あ？」

「見なさい、テロ組織・ジャスティスのこの哀れな姿を。バトルスーツを駆使してでも人っ子一人殺せはしない。その面君は一人殺した。成績は君が上だろう。が、その行為はルール違反だ。違反行為には罰を与えねばならないだろう——」

言って朱雀百華は、三本の指を立てて、それを同時に曲げる仕草を見せた。

それは合図の代わりだった——他のバトルスーツ四機に対しての合図だ。

朱雀百華とは違い、残りの四機は皆灰色のカラーをしたバトルスーツだった。どれも典型的なバトルスーツだ。頭部にはなんらデザインはなく、大きな青い目が特徴を示すバトルスーツだ。

それらは特殊な能力を使用することなく、ただ装着者の異常な脚力によって、一気に謙戯のもとへ駆け寄り、攻撃を仕掛けた。

一機は、加速の勢いに任せて飛躍し、そのまま飛び蹴りを決めようとしていた。が、最強と謳われた殺人鬼集団の一人は、それぐらの攻撃避ける事など簡易なことで、余裕で身体を右に避け、勢い

余った機体の脇腹目掛けて膝蹴りを浴びせた。

鋼鉄のボディを持ってしても、装着者の身体にかなりのダメージを与えたのか、そのまま一機は床に倒れ落ちた。

続いて二機目が、裏を回って右手に装着した光線銃を発射した。だが、これすらも謙戯にとってはかすり傷一つつかない程度のレベルだった。当たるはずの光線が、当たる事なく虚空に消えたのだ。光線が発射されて消失する間に、僅かな時間だが、黒い影が現れていた。

そのことを妙に感じていた三機目のバトルスーツは、少しばかり警戒しながら、慎重に遠方から射撃を繰り返していたが、銃弾が謙戯に当たることはなかった。

なぜなら、彼の身体を覆うように、黒い影が在ったからだ。

その影がまるでバリアのように、やって来る銃弾を黒い影の中の深い闇に吸い込むように捉えていく。

謙戯に攻撃が当たらないのはこのためだ。

射撃を繰り返す三機に氣を向けていた謙戯は、上空から四機目のバトルスーツが来る事を予測してはいなかった。

はっと気づいたのは四機目が踵落としを決めた瞬間で、謙戯は鉄の踵の攻撃に少々顔を歪ませていた。だが、それも一瞬の事。

縦断が暇なく飛んでくる前方を、影質操作で『影』を操ることでバリアを作り、攻撃を決めて一瞬の隙を見せていた四機目のバトルスーツの首をすぐさま掴み、そのまま握りつぶした。

常人には出来ない行為だった。

鉄以上に硬さを誇るバトルスーツの機材を、軽々しく潰し、首の骨までも粉碎するほどの怪力。殺人鬼集団・洞岳家が最強を名乗る資格があるのも、これだけで証明出来るようなものだ。

四機目のバトルスーツをそのまま穴の方へ投げ飛ばし、残りの射撃を繰り返すバトルスーツの方を見据えて、静かにつぶやいた。

「気弱な野郎だ」

そして、洞岳謙戯のイリュージョンとも称せられる攻撃が始まる。

初めに、周囲に映る影が、影質操作によって謙戯に操られ、物体のように空中に浮かび上がると、それが瞬時に刃物のような形状に変わり、三機目のバトルスーツの方向へ一直線に伸びた。

無限に広がる影はそのままバトルスーツへと進み、最後には容赦なくその影は――バトルスーツを貫いた。

まるで一本の槍の如く、その”影”はバトルスーツを突き刺し、そして謙戯の下へと戻っていった。

貫かれた三機目のバトルスーツは、鉄のボディごと貫通し、心臓に傷を負ったのか、無言のまま床に倒れ落ちた。

――早かった。

四機のバトルスーツを相手取った謙戯の勝利は、一分も満たなかった。

さすがの朱雀百華も、これには驚くばかりか慄然してしまい、同様に他のバビロンメンバーも驚愕よりも恐怖するばかりだった。

一方のジャステイスもまた、口をぽかんと開けたまま、呆然とするばかりだった。

「……血も吹き出さない相手だと、なんだか違和感があるね」

闘い終わった謙戯の第一声だった。

勝利の余韻を味わうことはせず、物足りないの一言だった。

その顔には笑顔もなにもかも感じられない無感情を体現した顔だった。いや、元々からそのような顔つきなのか。

「……………」

朱雀百華は沈黙を作っていた。

敵の圧勝に驚いたのではない。敵の成した不可思議な現象に、多少の不気味さを感じていたのだ。

バトルスーツ相手に生身の人間が勝つという前例は全くない。それはあり得ないことだ。

しかしその男はやってのけた。

だがその要因は――不可解な”黒い何か”によるものだ。

朱雀百華はそれが影とは知らず、未知の物質と思ったまま、考え

にふけていた。しかし段々と、考えるコトに無意味さを感じ、そしてとうとう握りこぶしを作った。――戦意の表れだった。

「これはもうテロ防止なんていう甘っちょろいものじゃありませんね」

朱雀百華の声を聞き、謙戯は眉を上げた。

「悪魔退治と命名しましょうか。――とんだ化け物だ、君は」

「俺からしてみれば、仮○ライダーみたいな貴方達のほうが、よっぽど化け物なんだがな」

バトルスーツを初めて見る謙戯にとってはそちらのほうが奇妙だろう。

だが、朱雀百華などバトルスーツ装着者や、その他の謙戯以外の人物にとっては謙戯の攻撃方法の方が倍に不思議なはずだ。

「君達はジャスティスを監視していなさい。武器を持っていながら抵抗はしないでろう。万が一華天水無月がまだ余力を残していたら、『ハイブレイクキャノン』でも使ってください」

朱雀百華は周囲の仲間に指示を出した。

「私はあの化け物の少年を相手取ります。バトルスーツを四機も倒すなど、只者じゃあないことは間違いありません。――朱雀百華が世界最強であることを見せてあげますよ」

そして、朱雀百華は空中浮遊の為のエンジンをフル稼働させ、最大のエネルギーを放出させた。

一気に天井近くまで上がった朱雀百華は、下に立つ謙戯に挑発をする。

「此処は狭いだろう。暴れがいのある外でやろうじゃないか」

「……何をですか？」

「君の専門は殺しだろう。だったら私を殺してみろ」

「その依頼は断りますよ。でも――なんだか“特別そうな機体”の貴方に勝ったら、この場で自慢出来そうな気がする」

謙戯の余裕に変わりはなかった。

「オーバーデッドの最新武装機械だ。その余裕も最後には苦痛に変

わかりますよ」

朱雀百華にも余裕はあった。

両者互いに、勝つ自信はあった。

勝つという表現は正しくないかもしれない。だが、朱雀百華にとっては化け物と称する謙戯に勝つことで、この状況においては有利な状況へと完全に持ち込むことが出来る。一方の謙戯にとっては、ただ楽観的に状況を満た結果が――朱雀百華を殺す事、というなんとも適当な決断だった。

崩れかけの一階フロアから出、晴天の下の広々とした屋外へと足を進めた朱雀百華を、追いかけるように、謙戯も床のある通れる箇所をステップ気味に通し、周囲の視線を気にすることなく外へと出た。

そこは、警察や装甲車に囲まれた空間。

十分に暴れまわる事のできる面積はあった。整備されたばかりの新しさを感じられるコンクリート、ところどころにそびえ立つ樹木の数々。

樹木の上に浮遊する赤のバトルスーツ――朱雀百華は、両手から青白い輝きを見せながら、謙戯に向かって言う。

「――来い」

005 赤色エンド／呆気無い終わり

朱雀百華の最初の攻撃は、両手の掌に装備された『エネルギー光線波動砲』からの光線弾発射だった。

電気の性質に似たエネルギーを一点に集中し、それを最大限の初速度で発射することで、瞬間的に敵に被弾させる。ピンポン玉サイズの弾であっても、威力は戦車の大砲並だ。いたって外傷は目立たずとも、全身の骨を折るぐらいの威力はある。

それほど強大な攻撃であっても、洞岳謙戯は難なく避けてしまう。えいしつそうさ影質操作で、攻撃を影に溶けこませることもせず、ただ単に身体を横に動かすという”避け”をするだけだ。

エネルギー弾が地面に当たった所為で、その場の直径一メートルほどに大きな溝が出来た。

それを見る謙戯は、口を大きく開けて驚愕したような顔を示す。しかしそれが本心ではなく、ただの芝居であることぐらい、朱雀百華にも分かっていた。

「避ける、か」

続けて朱雀百華はエネルギー弾を発射する。と同時に、一気に謙戯のもとへ近づき、勢いを使った回し蹴りを決めようとした。しかしそれさえも避けられ、エネルギー弾すらも避けられてしまった。拳句の果てに、大きな隙を作ってしまったため、朱雀百華は謙戯の飛び膝蹴りを食らうハメとなった。

しかしさすがは朱雀百華。それだけでは重度のダメージを得ることはなく、すぐさま上空に飛躍し、敵との距離をとった。

「君は身体に武装機械でも埋め込んでいるのですか？」

朱雀百華が問いかけた。

「武装機械？」

朱雀百華の上空からの蹴りに対し、謙戯は首を傾げながら身体を右に移動する。

地に足の着いた朱雀百華は、すぐさま体の軸を捻り、再び回し蹴りを謙戯に浴びせようとする。

「全世界の軍事兵器の中で頂点にそびえ立つ最強の兵器ですよ！このバトルスーツだってそうだ、武装機械の一つ！！」

「知るかそんなもん」

再び謙戯は避けた。

「機械を埋め込んでるって、サイボーグかなんかですか？」

「サイボーグ、ねえ。表じゃその話は不可能と言われているのですから、確かに君が武装機械を埋め込んだ人造人間であることはあり得ないでしょう！」

朱雀百華の猛攻は止むことがなかった。

しかし謙戯も、その攻撃が一向に当たる気配を見せない。

「だったら君はなんだ！？ 君のその力！ その身体能力！ 只者とは言いがたい！！」

「俺からしてみれば、貴方達のほうがよっぽど不思議でたまらないぜ。昨日まではそんな機械ものなかったはずなのに、いつの間にか世界に浸透してやがる。置いてけぼり食らってるぜこっちは」

「置いてけぼり？ いつだって世界は人類と共に歩んできた！ 君が置いていかれているのではない！ 君がただついて来なかっただけだろう！！」

「世界にか？」

「ああ！ 世界さ、オーバーデッド社だ！ 我々の手の中にあるこの星を、世界を、そこに住まう人類と一緒に過ごしてきたこの時間！ 全ては全て我々の物であり、我々の財産だ！ 何故世界を握れる力を持っているのか！ その答えはこれだよ！ バトルスーツ！

これだけで世界なんて簡単に支配出来る！ 一人の科学者が産み出した最高のテクノロジーで、我々は世界支配という夢のまた夢を実現出来たのだ！ つまり、世界とは――我々、オーバーデッド社そのものだ！」

「……」

（滅茶苦茶な話だ。……まるで別の世界の話みたいだぜ）

「問おう化け物！ その力は——世界のモノか！？ それとも何だ！？」

朱雀百華の両肩から虹色に輝く羽のようなものが出現した。それは大きく広がり、やがて翼となった。

鳥のように舞いだした朱雀百華は、上空からエネルギー弾を発射し続ける。

「興奮して気が狂ったか赤野郎。俺は世界のモノでも、何モノでもない。俺は俺だぜ。誰にも干渉されず、誰にも肯定されず、誰にも否定されず、誰にも感謝されず、誰に悲しまれず、誰にも笑われず、誰にも尊敬されず、誰にも模倣されず、誰にも殺されない——唯一無二の”俺”だ」

影質操作——洞岳謙戯。

最強にして最悪。

孤独にして孤高。

「会社が世界を握るなんてそんな滑稽な話聞いたことないね。そんな世界は今すぐ潰れろ」

謙戯の右腕から——影が伸びる。

それは大鎌の刃のような形状をした影だった。

まるで、大鎌を持つ死神だ。

朱雀百華はそれに驚き、エネルギー弾発射の間隔を縮め、ほぼ連続して打ち続けた。

だが今度は、謙戯の影質操作によって影が壁の役割を果たし、エネルギー弾は闇に消えていくばかりだ。

弾の消費が激しかったせいか、段々と威力とスピードが落ちて行く。

それを知った謙戯は右腕に生える”影の大鎌”を大きく横に振り、膝を曲げて、大きく上へと跳躍する。

そのアクションは瞬間だった。だから朱雀百華がどうこう対応する暇も術もなかった。

謙戯の顔は朱雀百華の顔と隣り合わせとなる。

朱雀百華の瞳に、謙戯の見開いた目が映っていた。

「憂さ晴らしとはいかなかったな。余計に苛立ったよ」

大鎌が振られた。

黒い影は、一瞬にして朱雀百華の首元へと伸びた。

無音の攻撃。後にばちばちと機器が損傷する音が鳴った。

高さ五メートルまで飛んだ謙戯は、そのまま地面に着地した。

攻撃から着地までの時間はわずか四秒。

謙戯が地面に着地したあとに、赤色の顔が上からぼとりと落ちてきた。

朱雀百華の身体と頭が離れている。

そのグロテスクな事実には、周囲の警察達は、呆然とし、それを仕切った後に――慄然した。

寒気が一気にあらわれた警察達は、”攻撃”という手段はすっかり忘れ、ただただそこにいる殺人鬼と、殺された朱雀百華の死体を見つめるだけだった。

これが殺人鬼。

これが洞岳謙戯。

容赦無く殺す。

容赦無く斬り殺す。

「……綺麗な翼だ」

謙戯は、朱雀百華の両肩から広がる虹色の翼を見て、そうつぶやいた。

美しさの余韻に浸ることはせず、すぐさま周囲を見渡す行為にうつった。

言うなれば、謙戯は警察や装甲車に囲まれている状況なのだ。

その時だった――。

ODP東支部の大きな玄関から、大量の人影が謙戯の目に映った。よく見るとそれは、先ほどのテロ組織・ジャスティスの面々だった。

「……………」

中には、一〇台以上のバトルスーツも共に歩んでいた。そしてリーダーの風貌を見せる男を中心として、

「我々の勝利だ！」

一斉に彼らは叫び、そして同時に黒煙が上がった。

ジャステイスの一人が投げた三つの煙玉によって生まれた黒煙は、ジャステイス逃亡の為のアイテムである。

急な出来事に警察たちも対応が追いつけず、全員が軽率な行動を取るばかりだ。発砲したり、叫んだり、追いかけようとしたり、など。

謙戯もまた、黒煙の発生に首を傾げるばかりだった――だが、

「一緒に来なさい！」

という拡声器越しの声の主に右手を掴まれ、強引に引っ張られた。鉄の触り心地だ。

バトルスーツを着ているのだろう。

「ちょっと、おい！」

謙戯ならばこれぐらい振りほどくことは可能だが、それはあえてやめにした。

新品の白いバトルスーツに手を取られ、仕方なくついていくことにした謙戯。

黒煙が消えるにはまだ時間が早い中、導かれた先にいたのは、ジャステイスのリーダー・レイだった。

「いろいろ話がしたい。ついてこい」

「……………」

あえて無言の反応を示した謙戯に対して、答えを聞くことなく無理やり連れて行くジャステイスだった。

波乱の幕開け、である。

006 勧誘テロリスト／正義を語る悪党を嘲ろ

海岸付近に設置された『クロックレッド』と呼ばれる10メートルほどの高さの時計台の中は、人が住めるような設備がされてあるが、今ではすっかりおんぼろとなっており、スキャンカメラも建設当時は設置されず、言うならオーバーデッド社の目に通らない場所だ。

しかし、電気機器が全く使えず、生活するには少し苦勞が強いられる。

時刻は午後一時。

クロックレッドは闇に溶け込んでいた。その闇の中に、ひっそりと過ごしている集団がみられる。

彼らはジャステイス。テロ組織だ。

そしてもう一人、現状の理解が出来ない不運な少年・洞岳謙戯が居た。

黒髪黒目。白い肌。至って普通の人種だ。

ただ、殺人鬼という肩書きを除けばの話になるが。

そんな彼が何故テロ組織と共にいるのかというと、本日起こったジャステイスのテロに巻き込まれた際、自身の力——影質操作を發揮した結果、興味を持たれたという理由だ。

故に、彼を真ん中に立たせ、ジャステイスのメンバーが彼を囲むように立っている。

謙戯の視界の中心には、碧眼の男・リーダーのレイが、無愛想な表情を見せている。

「洞岳謙戯、とかいったな」

開かれた口から出た言葉は、洞岳謙戯の名前の確認だった。

「ええ、はい」

特に緊張した雰囲気も見せず、謙戯は適当に返事をした。

「率直に問おう。」あの力”はなんだ？」

その疑問は、レイだけでなく、ジャスティスメンバー全員が抱いているもの。

あの力――。

謎としか言い用のない、黒い何か。

それを操るように駆使していた目の男。

「あの力？ はて、何のことやら」

挑発したのか、もしくは本当に理解していないのか。

謙戯は、とぼけた真似を見せた。

「貴様！ とぼけるな――！」

横から怒鳴り声と共に割って入ったのは、ポニーテールの少女・咲夜だった。白いパーカーを着、下にはジーパンを穿いている。

彼女はバトルスーツ・華天水無月の装着者だ。

「とぼけてなんかいません。」あの力”と言われて、一体”どの力”だっけと言うんですか。俺にはちんぷんかんぷん皆目見当もつかないな」

「あの黒いの！ 黒い影みたいなの！ 貴様が操ってたんでしょ！」

「ああ……、影質操作か。……確かに俺が影を操ってましたけど、もしかしてあの力ってこの力のことですか？」

謙戯の問いに、レイが答える。

「……ああ。その答えが真実なら、素直に俺は驚く、が、どうも現実味がないな。目の前で見せられて信じられないなんてことはこちらが明らかに理解力に欠けているが、しかしそれでも、あの黒い何かが影で、その影でバトルスーツを切断したりする事自体、ありえないの一言だ」

鋼鉄で出来たバトルスーツを、いとも簡単に斬ってしまった謙戯の荒業は、影質操作によって可能になるものだ。

影質操作とは――その名の通り、影質と呼ばれる特殊物質を我物のように操作する力だ。

影質とは、洞岳謙戯だけが操れる未解明物質で、光が物体によって遮られた箇所に出来る影を、特殊物質『影質』と化し、それを武

器として使うようにする——これが影質操作の正体だ。

その影質とは何か、奥深くまでの理解は謙戯自身も出来ていない。ただ、影質操作によって操られる影がとたんに真っ黒に色変わりすることと、影は別次元に繋がった空間の穴ではないか、という推測を謙戯は持っている。

影に通った銃弾などは、そのまま影の中へ消える。

薄っぺらい一枚の紙ほどの大きさでも、影は影。

形状を変えたり、物質構造を変えたりすることが出来る。この力を持ってして、洞岳謙戯が最強と呼ばれているに違いない。

「体内に何か埋め込んでいるのか？」

というレイの質問に、謙戯が答えようとする前に、短髪の男・正造が怒鳴り声と共に前に出る。

「レイ！ お前ふざけてんのか！？」

レイは眼球だけを正造の方へ動かす。

「ふざけていない」

「ふざけてんだろ！ 人造人間はこの世に一人、マリアしか居ないんだ！！」

レイの「体内に何か埋め込んでいるのか？」という質問で正造が怒った理由は、彼らの仲間であるマリアと呼ばれる女性が、世界でただ一人の“武装機械を体内に所持する人間”、通称『クリエイトノイド人造人間』だからだ。一般的にクリエイトノイドではなく、普通に人造人間と呼んでいるが。じんぞうにんげん

「人造人間が一人というのは確定事項じゃない。だからとりあえず訊いてみただけだ。……………落ち着け正造。お前の気持ちもわかるが、俺だって同じ気持ちを持っている。考えてみる。マリア奪還にバトルスーツを簡単に破壊したこの男の力が備わったら、その成功率は高くなるだろ」

「だけど！」

「いいか正造！ ……………本来ならば、俺たちは敗北していた」

「……」

「今回のテロは完全に失敗だった。甘くみていた。本当なら全員こんな所に居ない。皆殺されていたさ。だが――生きている。今ここうでこうして足で立って、息をして、声を出してしゃべっている。それはつまり生だ。何故生きている？ ……………此処にいる、この男の力によって、俺たちは生き残れたんだ」

「バビロンの連中をやったのは俺たちだ！ こいつが居たから生きている死んでるっつう問題は関係ねえだろっ！ なあ！ レイ！ なんなんだよお前！ 今日のお前なんか変だぞ！」

「――朱雀百華は確実に俺達を殺していた！！」

「……………」

「武装機械？ バトルスーツ？ そんなものただの軍事兵器だ。だがその”ただの軍事兵器”で、俺たち人間は簡単に殺される。今日だって、いや、今までだってそうだ！ ブラッドハウス襲撃時も、エラーポイント襲撃の時だって、テロリズムに成功していたのは必然でもなければ偶然でもなかった。オーバーデッドの奴らがただ単に見逃していただけに過ぎなかった！ 奴らが本気を出せば、俺たちは軽く殺されてるさ」

ブラッドハウスとは、日本に設置されている通称『血の沈黙』と称されている赤いビルだ。オーバーデッド社管轄特殊警察機関最高層総統部『セラフィム』の基地とされていたが、ジャスティスが襲撃した際には、そのような組織は所属しておらず、全くのフェイクというオチだった。

エラーポイントとは、オーバーデッド社の支社が置かれてある区域の一つ。その通称の由来は、不可思議現象が度々起こる『計算外の場所』というあだ名が付いているからだ。

「今回は特にそうだ。奴ら、今回こそは本気で俺達を殺しに掛かっていた。お前らも見ただろう！ バビロン、そしてあの赤いバトルスーツ――朱雀百華。テロ組織の一つでしかない俺たちを、最新型バトルスーツで壊滅させるつもりだったんだ。だが、そう、奇跡が起きたといってもいい。――こいつが居たお陰で、死ぬことは免れ

た」

レイは謙戯を見ながら言った。

周りの連中も、謙戯を見つめていた。

「……俺が偉大なる存在みたいなことになってますけど……やめてください気持ち悪いわ」

しかし謙戯自身、視線を浴びることに嫌気を差し、目を閉じながら手を振った。

周囲に居たメガネの男・グレイスが納得したような口ぶりで言葉を放つ。

「確かに、彼のおかげで今回は無事に済んだ、という事実はあるんですが、しかしレイ、どうしてそこまで”彼のお陰”だと評価するのですか。今までのテロが、成功に収まったのも、全てが敵の甘っちょろい優しさによるものとは限りません、貴方の作戦があったからこそ成功していたのですよ」

「……やめてくれ。今回の件で分かった。俺は弱者だ。——簡単に殺される弱者だ」

レイは弱気だった。

しかしそれとは裏腹に、何かしらの考えがあるのだろう。

「だが、皆が居たから、強者になれる自信を持てる。この”ジャステイス”がいるからこそ、俺は、俺たちは胸をはれる！」

レイの言葉に、周囲からざわめきが生まれ、次第にそれは歓声へと変わった。

咲夜は一層喜びの笑顔を見せ、同時に頬を赤らめながらレイを見ていた。

正造も、グレイスも、皆、レイの言葉に感心していた。

「正義を誇り、正義を語る、俺達で、世界に『正義』を叩きこもう！」

レイは右手を上突き出した。

直後にジャステイスの面々が皆一斉に手を上に突き出す。

意気投合の意味を持つのか、それともリーダーの行動を真似ただ

けなのか。両者にしろ、ジャスティスが一致団結した瞬間ではあった。

しかし、傍観者であり置いてけぼりの洞岳謙戯は、首を傾げながら欠伸をしているばかりだった。

それを見たレイが、手を軽く叩き歓声を鎮めると、謙戯の方へ視線を向けた。

「お前に来てもらったのは、頼みがあるからだ」

「……」

「一緒に、――世界に正義を与えてみないか？」

レイの右手が、謙戯へと近づく。

握手の形をした手を見て、謙戯はじっと見つめるだけだった。

「俺がお前の事を評価したのは、お前が命の恩人であり、ジャスティスを救ってくれた一人でもあるからだ。そんな英雄を、是非とも仲間にしたい。その一心だ」

しかし、レイの言葉に賛同する者が全員とは限らなかった。

華天水無月の装着者・咲夜や、グレイス、正造、その他のメンバー達の中には、謙戯を評価する思いなど欠片もなかった。

ただレイが言っていることだから、それだけを理由に、首を縦に振る行為をしていたのだ。

「洞岳謙戯、お前のその力が、必要だ」

レイの誘いに、謙戯は答える。

「――馬鹿じゃねーの」

その言葉に、レイも、その他のジャスティスメンバーも、皆驚愕した。

予想しなかった返答だったからだ。

「俺、正義とかそういうの語る奴、大嫌いなんですよ。特にあからさまに『ジャスティス』とか名乗る連中。テロリストの癖して正義だなんて名前乗る？ 気持ち悪い。甚だしいわ。悪党を着飾るな

ら、悪党を名乗ればいいものを。まるで偽善者ですよってアピールするみたいに、ジャスティスなんて名乗るなんざ……いやはや呆れた呆れた。とうの昔に呆れてはいるが、なに、世界に正義を与えよう？ 何をぬかしているんですか貴方は」

反感を買ったのは間違いない。

謙戯が、テロ組織相手に喧嘩を売ったのも間違いない。

「悪は悪。正義は正義。もっとも、この世に正義なんて存在しませんけど」

「……………」

「貴様何言ってるの!？」

「テメエ殺されてえのか!!！」

「……心外ですね」

ジャスティスのメンバーからの怒声が響く。

謙戯は耳を塞いで「うるさいうるさい」と舐めたような態度を見せる。

「第一に、テロ組織という時点で負けだぜ貴方達。あえて正義を語るなら、世界の、社会のルールを辿りながら語らないと、ルールから外れた電車やつらの語る事なんて、全て”偽物”に過ぎない」

レイに指をさす謙戯。

「それに、オーバーデッド社如きに殺されるなんてほざいているテロ組織が、世界に革命を起こすなんて無理ですよ。せめてあの赤い野郎でも自力で倒してみろよ。俺にとっては、カス以下に過ぎない存在だったけどもね」

「テメエいい加減にしろコルアッ！」

短髪の正造がとうとう堪忍袋の緒が切れた。謙戯の胸ぐらを手で掴んで、顔を近づけて恐ろしい形相を見せる。

「殺されてえのか……!!」

静かにそう言った正造に共感するように、周りの連中も憤怒の視線を謙戯に送る。

「殺してみろよ」

「……このやろう……!」

「知ってるか？ 殺すとか口に出した時点で相手が殺されていないのならば、それで負けなんだぜ」

言って謙戯は、正造の額に頭突きした。

ごつんという鈍い音が響き、その音からしてかなりの痛さを感じ取った周囲が、一斉に目を見開いた。正造自身もかなりの激痛を受け、額を押さえながら床に倒れ込んだ。

一方の謙戯は、嘲るようにして、正造を見ていた。

「……そのリーダーさん」

と、謙戯は言った。

「……?」

レイも少なからず怒りを抱いているかのような表情を見せる。

「一日考えさせてください。きちんと答えを出しますから」

その言葉は意外だった。

レイ自身返ってきた言葉に驚き、少し安堵を示した。てっきり強引にでもここから抜け出すのかと思っていた相手が、きちんと決断するという事に、やや嬉しさを抱こうとしていた。

もちろんそれだけの感情を持っているわけではない。

約八割の内心は、憤怒に満たされている。

それは、自分達の事を何も知らない洞岳謙戯に、馬鹿にされたからだ。

「……分かった。一日待とう。明日の夜、返事をきく。それまで此処で適当に過ごしていかならん」

レイは伝えることだけ伝えて、その場から立ち去っていった。それについていくように、他のジャステイスマンバーも立ち去っていく。

数人ばかりは残っていた。その内の一人、咲夜は、冷たい視線を謙戯に送っていた。

もう一人、長身の持ち主でセミロングの少女・凜音が立っている。強気な姿勢を見せる彼女は、謙戯に近寄り、彼の背丈を越しては

ないものの、強気な目線で威圧感を示した。

「今度レイを馬鹿にしたら、本気で殺す」

凜音はそう言って、すぐさま立ち去っていった。後に咲夜たちもその暗闇から消えていく。

闇に残った謙戯は、虚空に呟く。

「……なにがなんだか」

彼は意外にも苦悩していた。

一つは現状理解が出来ないこと。

もう一つは自分の存在のこと。

両者を重ねて考えた結果——彼の結論は二つ。

一つは、未来にタイムスリップしたという空想的考え。

一つは、別世界に飛んでしまったというまたも空想的考え。

隠れた結論があるとすれば、自分が夢を見ているという最悪な結論だ。

最後はないとして、二つのどちらかが本当だとすれば、自分は大変な状況下に置かれたとみて間違い無いだろう。

それでも上手くこの世界に対応出来るのは、彼が殺人鬼だからというわけではない。

この世界が弱肉強食ならば、彼は強食の立場にあるからといって過言ではないだろう。

強いて言えば——最強の位置に君臨しているからか。

「朱雀百華をこうも簡単に……」

「なんらかの武装機械を体内に埋め込んでいる、もしくは遠隔機能

を使った武装機械を使用しているのかもしれませんが。どちらにせよ、彼が驚異的存在であるのは間違いありません」

暗い一室の中で、テーブルモニターの画面に照らされた老人の顔が見える。

その後ろで、タブレット端末の光に照らされた若人の顔も見える。髭を生やした老人は、モニターから流れる映像を見ながらしきりにつぶやいていた。

「あの朱雀百華を簡単に破壊するとは……」

「……この黒いモノが一体なんなのか、それがわかれば対策は出来るのですが……」

「いや、調べる必要はない」

「何故、ですか？」

老人はモニターに映る——洞岳謙戯と朱雀百華の戦闘映像を見つめながら言う。

「九重院を呼べ」

「……バビロン特攻隊副長・九重院白を、ですか？　しかし何故……」

「……」

「クリエイトノイド“人造人間”ならぬ^{アップノーマルノイド}“改造人間”の九重院白だ。奴ならこの男をやってくれるはずだよ」

007 執拗ジャスティス／動き出すバビロン

特別警察機関バビロンの特攻隊副長といえは九重院白だ。くじゅういんはく

改造人間と呼ばれる彼は、世界で数人しかいない人種、という表現も正しいとはいえないが、新たな人間として確立した存在であることに間違いはない。

九重院白ときいて、怯える者が大半だ。残りは自らがより強いと自信を持っている連中ばかりだ。

改造人間である彼の特徴は、いわば肉体をバトルスーツと化している状態にあることだ。本来、バトルスーツは身体に装着することが基本となっている。肉体の防御、攻撃の展開の拡大を目的とした意味もあり、バトルスーツが着るものであることが有利な点が多い。しかし、改造人間はそのぶんデメリットが多い。

肉体の損傷が少しでもあれば、身体内に埋め込まれたバトルスーツのシステムに支障が起きる可能性もある。また、ベースが生身の人間である以上、簡易に心臓を貫ける状態であるため、そうされれば即死する。

だが、デメリットの数が多いだけ、メリットの価値が大きいのだ。それは、即出勤出来るバトルスーツ、通常のバトルスーツでは出来ない技の発動、コスト削減、この三つだけだが、即出勤という点においては非常に優れた部分である。

四〇分掛かるバトルスーツの出勤が、一秒とかからず可能となるわけだ。中には出勤時間短縮となった朱雀百華などもあるが。

オーバーデッド社内で秘密裏に造られた改造人間は、そもそも一〇年前から存在していたプロジェクトが発端である。

人類の思想の中に芽生えていた『サイボーグ』サイボーグという、所謂人類の進化を構想した結果が、最終的に改造人間という軍事兵器となってしまったわけだ。当然過去は、簡単にそれを製造することは無理であった。その当時のオーバーデッド社にも最高峰の軍事兵器開発

力はあった。だが、今で言う『大量生産型バトルスーツ01』を造るので精一杯というところだったのだ。

それが五年して、本格的に開始したサイボーグ計画は、徐々に成功に近づいていき、辿り着いたものは――人体実験というものだった。

被験者として選ばれたのは一〇〇人いた。そのうち七九人は実験途中に死亡。一人は改造人間化アフノーマルノイド（当時はサイボーグ化と称されていた）に成功した後に、肉体内部の機械破損により死亡している。

残りの一〇人は完全に成功した結果となった。

その内の一人――九重院白は、中でも上位の強さを持つ改造人間アフノーマルノイドなのだ。

「……以上が、改造人間アフノーマルノイドもとい九重院白の詳細であります」

長い説明をしていたのは、バビロン統括部隊・アルビノの参謀担当・フリーガーによるものだった。金髪碧眼のアメリカンの若人である。彼の手にするタブレットに、九重院白のデータが表示されていた。

そして、同室にいる、白いコートの左胸に三日月のバッジをはめてある男・新道謙光は、あごひげをなぞりながら、ゆっくりと答える。

改造人間アフノーマルノイドの噂は聞いたとったけども、身内に居るとは思わなかったわ。で、特攻隊副長が何故、弱小のテロ組織なんぞの壊滅任務に向かうハメになったわけよ」

「それが、上層部からは詳しい話を聞いていないのでよく分からないのですが、とりあえず言われたことは――九重院白ほどの力量が対処出来る敵が組織内に居る――とのことでした」

「……ジャスティスといえば、粹がった連中だろ。井の中の蛙野郎率いる盗人軍団って聞いたわ。なんでもウチの華天水無月を堂々と使って暴れてるらしいね。……聞いただけじゃ、九重院使うまでも

ないと思うんだが……」

「私も疑問に思いますが、わざわざ九重院白特攻副隊長を呼ばなくとも、他の下の者に任せれば良いのに……」

「これじゃ、ジャステイスの連中は壊滅というより絶滅だな。皆殺されてハイお終いってことになるわな」

「……ジャステイスは若者に支持を得ているテロ組織ですからね。オーバーデッド社が壊滅させたという情報は流されたくありませんね」

「分かった。ジャステイスの壊滅任務は『裏任務』としよう。九重院白の任務遂行、ウチは許可する、と言っといてくれ」

「了解しました」

バビロン統括部隊・アルビノの動きも活発となっていく。

ジャステイスの壊滅任務開始が、着々と近づいていた。

「お前さん、バトルスーツ四機相手に余裕で勝利したらしいじゃないか」

クロックレッドの四階。月光で少し明るいフロアの窓際に、額に傷のある巨漢・カイトが、洞岳謙戯との談話を楽しんでいた。

彼は組織内では謙戯に友好的な人間であり、謙戯自身も彼には素直に笑顔を見せている。

「ええ、まあ。……弱っちいですよ、あんなもの」

「バトルスーツを弱っちい、か。……俺もそんなこと言ってみてーよ」

カイトは夜空に浮かぶ月の光を眺めながらつぶやいた。

「俺の見た目、どう思う？」

唐突に疑問を投げかけたカイトに、謙戯はじーっと彼の体格を見つめながら答える。

「力持ちって感じかな」

「そうさ。皆そう思う。だけど違うんだよ。俺は見た目騙しには自信があるが、力自慢には根っから自信がない。生まれつき身体が弱くてな、それなのに体格は異常に良い。筋肉もあるだろう？　だけどこんなもん使えねーのさ。一種の病気だよ。世界で数人しかからない病気らしい」

「……」

「俺の担当は情報収集でな。お前の活躍をこの目で見たかったが、生憎そういうわけにはいかなかったのさ。俺が実戦に出たら足引っ張ってばかりだったろうよ」

カイトの病は、いわば力の発揮が上手く出来ない、といったものだ。一種の病気と彼は言ったが、これは後天性運動機能障害不十分発揮症候群と呼ばれるもので、病気というより、障害である。

「こんな俺でも、世界の革命とやらに参加出来るんだぜ？　凄いと思わないか。レイは本当にいいやつでな。絶望しきっていた俺に手を差し伸べてくれたのさ」

「ふーん」

「お前もきつと、アイツから何かを学ぶのかもしれないな」

「（学ぶわけねーだろ）……そうかもしれないですね」

内心に冷徹な思いを込めながら言った謙戯は、苦笑いをしつつカイトとの談話を適当に終わらせ、その場から立ち去った。

「貴様が朱雀百華を倒した、というのは認めるわよ。だけど、貴様がレイに勧誘されることは認めないわ」

「（また面倒な奴が……）」

三階へ降りようとした謙戯を、階段の踊場で待っていたのは、華天水無月の装着車・咲夜だった。コートに身を包んだポニーテールの彼女は、顰めた顔で謙戯を見ている。

「貴様、武装機械を遠隔操作でもしてるの？ それとも小型の武装機械でも隠してるわけ？」

「……はあ。そんな覚えは全く」

「だったら、なんなのよ。なにをどうしてあの朱雀百華の首を切断したのよ！」

「（キレるなよ……）」

それからの謙戯の説明は、ひどく曖昧で、矛盾していて、適当すぎていたために、咲夜自身も混乱し、結局話を吹っ掛けた彼女自身が、怒って話をやめたのだった。

——俺はこの世界の住人ではない、という推測を立ててみよう。

謙戯は思考することにした。理由はいたってシンプル。自らの経験した今までの人生の記憶に合致する世界観ではないからだこの世界は。

——つまるところ、俺は未来にタイムスリップしたのか、全く異なる別の世界に来てしまったのか、もしくは世界に何らかの改変が生じ、俺の記憶はそのままの状態であったのか、空想的考えがちらほら目立ってくるが、それでないと話が合わない。あのロボットみたいなの……バトルスーツとかいった機械や、洞岳家の認知度が皆無だった……俺が居た世界とは何らかの違いがある。

——いや待てよ。俺の姓である『洞岳』の認知がないということ、この世界が未来の世界である、という説は消える事になる。自分で言うのもなんだが、洞岳家は世界的に有名で、教科書に載るぐらいの危険な殺人鬼集団としての異名を持っている。未来の世界だからといって、洞岳家の名前を知らないわけがない。警察すら知ら

ないのだから。

——だとしたら、世界改変か、別世界への転移の二つが有力になってくる。

——正直、この世界に対応出来るほどの知識は持っていない。教育機関にもほとんど通っていないかった俺ならば、この世界の順応など無理に等しいはずだ。コミュニケーションの取り方さえ下手くそな俺だぜ。

——説は二つ。仮にどちらかが真実だとしても、だとしたらそれは非常に最悪な結末という事になる。

——うむ。影質操作が有効的なのが唯一の救いだ。とりあえず今は、このアホらしいジャスティスとかいう組織から抜け出す事に専念しよう。

謙戯の考えは終幕した。

数十分前まで此処（三階への階段の踊場）に居た咲夜の姿は見えない。彼女がいつ怒声を投げかけてくるか知れたもんじゃない。カイトとかいう愛想の良い男性の姿も見えない。面倒な話を持って来られたら、聞き終わるのに時間が掛かる。

謙戯はそんなふうに、疲労困憊したかのような顔を示し、壁にもたれる。

「逃げるか……」

有言実行をする男はある。

謙戯が逃げると言ったのなら、逃げるほかない。

彼は一階へと降りていった。途中人に会うこともなかったが、近くで喋り声が聞こえることがあった。

クロックレッドから出ていくと、辺りは街灯というものが何一つなく、暗闇に満ちていた。

やけに簡単だった。建物から出ることすら厄介かと思っていたが、意外とすんなり屋外へいけた。

そのまま、ここから遠い所へいき、この世界についての手がかりでも、自力で探そうと決意しては、足を一步踏み出す。

「何処へ行く？」

謙戯の耳に男の声が、唐突に届いた。

「……」

聞き覚えのある声のする方へ首を向ける。

波の音が聞こえる方向だった。月光に当たった木々の影の下に、大型の銃火器を持ったレイが立っていた。

謙戯が気づいたときには、周囲にジャスティスのメンバーが囲んでいた。

中にはバトルスーツが一機。

華天水無月だ。

「帰るんです。自分の家へ」

「ほう。お前にも、帰る所があるんだな。意外だった」

レイの反応は実に素直で、敵視したような目付きの割には普通の返答だった。

「ええ、じゃあ」

謙戯は適当に返し、足を踏み出す。

途端に、彼の靴先一センチに、弾丸が突き刺さった。

同時に響いた銃声が、波の音を描き消していた。

「……足撃たれたら、ものっそい痛いですよ」

謙戯は、弾丸を放った男・カイトの方へ首を捻る。

「悪い。レイの命令だ」

カイトは頭を下げることもせず、ただ変化のない声色で述べた。

謙戯は呆れたような顔を見せて、再びレイの方を見つめた。

「無理矢理にでも、俺をこの組織に入れようとしてるんですか？」

「お前の力が必要なだけだ。それがあれば、俺達は本当に世界に変化を起こせる」

レイは謙戯の方へ歩みだした。

「世界に変化を起こす理由ってなんなんですか？ 何のために貴方達はテロリズムを働いているんですか？」

無表情の中の問いを、謙戯は投げかけた。

「正義だ。この世界は腐っている。今もお腐っている。これから
も更に腐っていくだろう。……会社一つが世界を手中に収め、世界
を独占したかのように、我物のように、好き勝手に弄ぶ」

「どこもそんなものでしょ」

「……たとえそうだとしても、この世界は異常なんだ。この世界に
は、区別がない。――正義も、悪も、善も、偽も、何一つ区別され
ていない。そうさ、全てはオーバーデッド社、全てがオーバーデッ
ド社なんだよ」

「それが現実でしょ」

「現実だから仕方ない、そんな結論を述べる奴は、一歩進んだつも
りでいて進んでいないのさ。――理想を求める事、理想を追いかけ
る事、その理想ってやつが果てしなく無謀に違いものでも、そこに
近づこうとする経緯だけでも、十分に立派だ。俺達はその理想を求
め、探し、追いつき、そして、手にする！」

理想とは、現実とは違い。

誰もが想像したが、創造してはおらず。

探すことはできても、見つけることは出来ない。

形のない存在だからこそ、常時存在価値の変わる代物だから、見
つけるのが困難なのだ。

「正義をこの世界に与える。それが俺達、ジャスティスだ」

レイは胸を張って言った。

「……そこまでの意味は？ その原動力の源はなんなんですか？」

「かつてオーバーデッドに兄を殺された。過去最悪のテロリスト『
ブラックスカル』との争いをしていたオーバーデッドのバトルスー
ツが、無闇矢鱈に攻撃を仕掛け、その代償に数百人の人間が被害に
巻き込まれた。俺もその中に居た。だが命は助かった。何故か？」

兄に助けられたからだ。――その命と引き換えに！」

過去に、最強にして最悪のテロリスト『ブラックスカル』という
者が居た。その名の通り、黒い骸骨の姿をしたテロリストである。
その容姿の正体はバトルスーツという説が有力だが、中には悪魔と

称する説もある。どちらにせよ、最終的にブラックスカルはオーバーデッド社の（当時においての）新型バトルスーツ・紫式武に敗北し、その後行方不明となった。死亡されたとの報道がされたが、その真相は定かではない。

「目の前で兄を殺された！ 俺の顔には血飛沫が掛かった！ うめき声を上げて悲しそうに俺を見る兄の顔が鮮明に記憶にある！ そんな顔してほしくなかった！ どうせなら俺が死ぬべきだったんだ！ ……だが、だが！ ……過去は過去だ。兄はもう戻らない。いつまでも悲しんでいるわけにはいかなかった。だから俺は、もうこれ以上オーバーデッド社を好き勝手にさせない、そう決意して、デモを起こした」

「……」

「それがジャスティスの誕生の発端で、デモの時の仲間が、こいつらだ。後にやって来た連中もいる。皆、この世界を変えようという意志があり、それが強い者達だ」

レイの熱弁を、謙戯は真剣に聴いているような様子だったが、

「で、俺の意志はどうしたの？」

「……」

「俺の意志は何処に行ったんですか。別にこの世界を変えたいとか思っていないし、どうでもいい。貴方達が世界を変えたい意志があるからテロリズムをしていることは理解しましたけど、意志のない俺を無理矢理勧誘しようとするその態度は、一体全体どこから湧いて出たのさ」

「……その力が、世界の変化に必要なんだ」

「失せろ」

影が伸びる。

その影は刀身のような形状になり、レイの持つ銃火器を半分に切

断した。

よく見ると、謙戯の右腕から黒い影が伸びており、それがレイの持つ銃火器を破壊していた。

周囲は一瞬驚くも、すぐさま警戒態勢に入り、所持していた武器を一斉に謙戯へと向けた。

「貴方の熱弁は正直気持ち悪かった。最終的に俺の意志は関係ないのなら、それでお終いだぜ」

謙戯の言葉が終わると同時に――

彼を中心として、地面に広がる黒い影が立体化し、一本の太い線となり、無数に分かれ――一つ一つが黒き刃へと変わり――周囲のジャスティスメンバー全員の首元に、瞬時に向かっていった。

一瞬の出来事だったために、連中は手も足も出せなかった。

レイは切断された武器を見つめながら、目を見開いている。

その圧倒的な力、技術に、素直に驚き、素直に慄然していたのだ。「今度会うときは敵ですよ。ジャスティスの皆さん。生憎俺は、正義に反する人間ですから。最も俺は、正義とか悪とか、そういうのを語る奴は大嫌いなんです」

そう言って、

謙戯は軽やかなステップをし出した。そのままリズムよくステップをしていき、ジャスティスの囲いから軽々と抜けていくのだった。

残されたテロリストたちは、首元にあったはずの黒い影が消えていることに気づくと、それでもなお沈黙を続けていた。

レイは、謙戯の去っていった方向を向きながら、つぶやいた。

「貴重な人材だ。まだ諦めるのは早い」

008 御買物ガールズ／その裏を這う者

異世界では、最近都市伝説たるものが噂されている。

——生きてキマイラウエポンいる武装機械。

寄生虫のごとく人間にとりつき、身体能力を最大限引き出して、鬼のような力を持つという。

あくまで都市伝説であり、学生間で有名なものである。学生の中ではおもしろがる生徒がほとんどで、人々は武装機械ではなく——武装奇怪と文字を変えた呼称を使っている。どちらにせよ発音は同じだが、武装奇怪のことをキマイラと呼ぶことが多い。

特に噂の流れが多い都市・メインエリア。人口数一番のこの都市だからこそか、奇妙な噂の伝染力は半端ではなかった。

そんな噂を聞いたものの中に、一人、何のことやら理解出来ず、興味を示さない男が居る。

洞岳謙戯だ。

黒いコートに身を包み、堂々と街中を歩く彼は、殺人鬼にして最強である。

車道を走る『浮いた車』や、空を飛ぶ『飛行車』など、見たことのないものばかりに気を取られていた。彼にとっては、耳で聞いたことより、目で見たもののほうが十分に興味を示すのだろう。

洞岳謙戯は街中を歩いている。

しかし一方で、バビロンという特別警察機関が彼を狙っている。現在進行形で。

「私ね、終さんしゅうさんみたいになも無きヒーロー？　みたいになりたいな
ーっ！　って思ってたたりしてるんだ」

「終さんは特別ですよ。あの人はいろんなもの背負ってますから」
両手を上空に上げて、大きく背伸びをしながら願望を口にしたの
は、ツインテールの少女・江堂美純えどう みずみだ。花柄のTシャツに、ジーパ
ンを穿いている。

美純の願望に答えたのは、ロングヘアの少女・統夏菜おさむなだった。
彼女はタブレット端末を見ながら、美純の横を歩いていた。

場所は、メインエリアブロック・オメガ。若者達に人気の買い物
スポットとして有名な所だ。歩く横には必ずお店が並んでいる。中
には巨大な高層ビルも建ち並んでいる。全てショッピングセンタ
ーだ。

「やっぱ終さんって特別だね。……だから強いのかな？」

美純の語る終さんとは、勇梅終ゆうめいしゅうという少女の事である。彼女らに
とっての先輩にあたる。

「私もよく分からないですけど、過去につらい思いをしたそうです
よ……」

「そっか……」

「あ、ああっ、落ち込まないで下さい美純ちゃん！　美純ちゃんも
頑張れば名も無きヒーローとかになれますよ！　きっと！」

「夏菜、そんな無理しなくて言わなくて良いつて。私だつてなりた
くてなれるものじゃないことぐらい分かってるし、終さんが特別な
人ってことも理解してるよっ」

「でも、まあ、その……名も無きヒーローって、なりたいつて思っ
てなるものじゃないって、私思いますよ」

「そう？」

夏菜は喋る。

「誰かを救うとか、誰かの安全を守るとかそういうのじゃなくて、
誰かが一つ一つ幸せを感じられるようにすることが良いと思います。」

そのなかで、誰かは誰かを英雄だとか、ヒーローだとか、恩人だとか思ったりするんですよ」

「……夏菜のくせに格好良いこと言うなーっ！」

美純は夏菜の頭をぐりぐりと拳で弄る。

「わわうわ！ やめてくださーいっ!!」

「まーでも、確かに夏菜の言うとおりだよな」

「ちょ、も、もうっ、美純ちゃん痛いよーっ！」

美純は夏菜の頭をようやく手放した。

そして彼女はふと呟く。

「誰かを救いたいと思う気持ちって——悪いのかな」

夏菜は視線を美純に向けた。

「……そういうのって、下心とかあったりするのかな」

「美純ちゃん？」

「うーむ……難しい話ですな」

と美純は言って、再び夏菜の頭を弄り始めた。

「わ、もう、痛いですよっ」

ぐちゃぐちゃになっていく夏菜の髪の毛は、整えるのに時間が掛かりそうである。

しかしそれでも美純は弄り続けながら、自らの考えに没頭していた。

「でも終さんって、なんかそういう気持ち持っていない気がするんだよねー。なんていうか、困っている人なら誰だって助けちゃうみたいな」

「い、いたい。痛いですって美純ちゃんっ」

「そういうのは、お人好しって言うのかな……？」

そしてようやく、美純は夏菜の頭を放した。

解放された夏菜は乱れた髪の毛を櫛で整えている。

「……あんまり深く考えないことですよ、美純ちゃん。私達まだ一六歳ですし、学生ですよ。難しいこと考える前に、まずは次のモニターテスト合格しないと」

「……うがー」

「あーっもう！ また髪の毛いじらないでください！」

「夏菜がテストの話するからだよ！ ……私ぜんっぜん勉強してないよ……。歴史分野なんて全く覚えてないよ……。…」

「美純ちゃんが得意なのは数学ですもんね。暗記系苦手分野なんでしょ」

「ばーか。数学は暗記系じゃい」

美純は夏菜の頭をまたまた弄ろうとしたが、怯えた夏菜の顔を見て、それだけで満足し、結局脅しで終わった。

来月には、彼女たちを、”モニターテスト”と呼ばれる、所謂定期試験が待ち構えている。

しっかり者の夏菜にとっては楽な試験だが、勉強が得意ではなく運動系の少女・美純にとっては非常にハードルの高いテストというわけだ。

しかし楽観的な美純は、今日も夏菜を誘って買い物に出かけようと誘っているわけだが。

「とりあえず、ネオン（ショッピングセンターの名称）にでも寄ろっか」

美純は適当に言った。

「お買い物ですし、何か買いたいものとか見つかりかもしれませんか。というか、美純ちゃんは今日何を買いに来たんですか？ ネオンに売ってあるんですか？」

「……………」

美純は無言を続けていた。

「美純ちゃん？」

「暇をつぶす時間を、買いに来たのさ」

「……暇だったから私を呼んだんですね。買う目的もないのに、買い物に誘って……」

「あははははー……ごめんちゃい」

二人はそれから二時間も過ぎた。午後一時を示したデジタル時計が、いつの間にか午後三時を示していたことに両者とも驚き、二時間も過ぎていたショッピングセンターから出、次なる目的地も定まらないまま、適当にぶらぶらと街中を歩いていた。

「結局何も買ってないですね」

「いやー、買いたいもの一杯あったけど、今月はお小遣い厳しいし、それに、今月末に発売する新型の『ミュージックボックス（MBX）』買いたいから……」

「そういえば、そのMBXって、音声でファイル名を認識して、すぐにそれを再生する機能がついたんでしたっけ？」

「それだけじゃないのだよ夏菜。新しいMBXは、その端末だけでなくに音楽がダウンロード（DL）できちゃうのさ!!」

「ほおーっ。凄いですねー、進化してますね音楽機器」

「いやー、値段が八万円だからねー。高いよねー。ぼったくりだよねー」

「……高いですね」

「買えるわけないよねー」

「……今、美純ちゃんはお小遣いくつ持っているんですか？」

「二三四六円」

「……細かいところまで覚えているんですね。というか買えるはずないですよ。旧型のMBXすら買えませんよ」

「今月はお小遣いもらった瞬間にお洋服買ったから」

「はあ……」

美純は要するに金がないのにもかかわらず、夏菜を買い物に誘ったわけだ。いや、買い物と称するよりはただの散歩というべきだろうか。

夏菜も少し溜め息を吐くが、それが美純である、これが彼女だ、と理解しているからか、怒ることも呆れることもせずには納得したよ

うな顔をすぐに見せるのだ。

「じゃあっ、今度はあのお店行こうッ!!」

美純は先にあるビル型のショッピングセンターを指さした。

「どうええっ? ……また行くんですか。買い物しないのに……」

驚きを隠せない夏菜に対し、美純は容赦なく彼女を引っ張る。

「ほらほら、行くよ! セっかくの休日なんだし、一分一秒たりとも無駄にしちゃダメなんだから!」

二人が店へ近づこうとしたその時だった。

ビルの玄関（自動ドア）から、黒いニット帽を被り、全身黒のジヤージを着た男が、慌ただしい様子で現れ、そのままこちらへ走りだした。

そして、歩道を通る一人の老婆が持っていた革鞆を強引に奪い取り、そのまま夏菜の横を通り過ぎた。――ひったくりだった。

夏菜達はすぐさま追いかけようとする。

「ちよっ、ひったくりじゃないのッ!？」

「美純さん、追いかけますよ!」

「え、あ、う、うんっ!」

冷静な対応を見せる夏菜に対し、美純は少し焦りを感じていた。

彼女らが後方へ振り返り、走りだそうとした時――ひったくり犯は路上に止めていた『空中走行バイク（通称…エアバイク）』にすぐさま乗り、素早くバイクを走らせた。

轟音をたてながら向こうへと駆けていくひったくり犯を、二人は一度は呆然と見つめていた。

追いつくわけがない、そう思ったからだ。

しかし、夏菜は、呆然から行動へと移った。

タブレット端末を開き、空中に映る電子モニターの右下に映る『電話帳』のアイコン（開かれた本の形）をタッチし、ア行の八段目に表示された――”勇梅終”の文字をタッチした。

「……………」

『…………もしもし?』

「あ、終さん!？」

タブレット端末のスピーカーから女性の声が聞こえる。

その声に反応し、夏菜は声を放った。タブレット端末の表部分の下部に設置されてあるマイクから声が向こうに通るように仕組まれている。

『あれ？ 私の声エコー掛かってる?』

電話越しの女性がこの問いを投げたのは、ハンズフリーモードという状態にしたため、相手の声が直接スピーカーから出されるように設定されてるからだ。その為、スピーカーからの音をマイクが拾う為に、電話の主は自分の声があとから聞こえてしまう。

「すいません！ 急ぎの用なんです！ 今大丈夫ですか!？」

夏菜はえらく焦りの入った口調で話す。

『……大丈夫だけど？ 何かあったのかしら?』

「ひったくり犯に遭遇したんです!」

『ひ、ったくり……犯?』

「相手はエアバイクで逃走して、お婆さんのバッグを盗んだままなんです！ お願いします終さん！ 協力して下さい!」

『協力もなにも、そのひったくり犯は今どこにいるのよ……』

「エアバイクのナンバーを記憶してます。テラバイト（民間警察機関）のデータベースにナンバーを検索すれば、リアルタイムでの捜索が可能となります!」

『その権限使っていいの?』

「時間がないんです！ 協力して下さい!」

『……分かった。私準備するから、統さんからの情報待ってる!』

「すいません急に……」

『良いの良いの。困ってる人を助きたい気持ちは正しいことだから』
そう言って、電話越しの女性から通話を切った。

そこからの夏菜の行動は早かった。タブレット端末のモニターをテラバイトのホームページに切り替えた。そこから彼女は、ソースコードを表示し、中央に並ぶ文字列をコピーしURL欄に貼り付け

ると、映しだされた黒いページの中央に設置されたパスワード書き込みフォームに、『∓delta89baby1on%71+10ss1%』と入力した。

直後に画面に表示されたテラバイトのデータベースの検索欄に、「エアバイク no. 489-F-0057」と入力した。

検索結果に現れたのは、三年前に発売されたオーバード社の『クリスタルジェット05』の全体画像、そして、それを購入した男の顔写真が映っていた。

夏菜はその男の顔を記憶し、そして上部に表示されている目のアイコンをクリックした。

「……これだ」

モニターに表示されたのは、地図と、道をたどる赤い丸印だった。「これです！ この赤い丸がひったくり犯です！ ……まだそこまで遠くには行ってませんよ！」

夏菜の言動に、ぼーっとしていた美純は思わず驚愕を示した。

「あ、え、ああっ！？ ……そう、なんだね！ そうか、この赤いのがひったくり犯ね！」

正直美純は、夏菜の言動についていけず、というより、夏菜の行動力に素直に驚いていた。

ここまでするのか、と。

「追いかけましょう！」

夏菜はタブレット端末をしっかりと握りしめ、真剣な眼差しを美純に向けた。

「う、うん！」

美純は多少の焦りを抱きながらも、しっかりと返事をした。

犯罪率の高いエリアの中で、一時間に大量の人間が虐殺されていた。

しかしその事態に、表では誰も気づいていない。マスコミ機関も全くアンテナに引かなかっていない。

だが、警察機関は当たり前のように知っている。

ただ単に、虐殺の原因が警察機関によるものだからだ。

特別警察機関・バビロンの特攻隊副長・九重院白くじゅういんはくが、犯罪者と思しき者達に尋問をしては、狙いの者でないと分かるとすぐに殺す、という手段をとっていたからだ。

「ハズレ、のようですね」

純白のコートに身を包み、“白色に染めた鋼の右手”で頭を掻き毟りながら、九重院白はつぶやいた。天然パーマの髪が余計酷くなつた。ぼっさばさである。

高い身長を持ち主だ。何事も気だるそうな目を持ちながらも、その高さの威圧感で全てを跪かせるような容姿だ。

九重院は、足で踏みつけていた男性の顔を、更に踏みつけ、潰した。

頭蓋骨が碎かれる音が嫌に響く。

血が飛び散り、九重院の白のコートに飛び散った。

「あーあ。……最悪ですね」

九重院の足は、潰された顔を持つ男の身体を蹴飛ばした。

「朱雀百華をいとも簡単に破壊する男が、こんなに雑魚キャラのはずがないですよ」

その言葉を発した九重院は、彼の後ろで青ざめた顔を見せる数人の武装した男性達の方へ首を捻った。

「早く見つけましょうね。……“殺すべき存在”を」

ニタツと笑うこともなく。

眉をひそめることもなく。

ただただ、無表情で語る九重院白。
彼はすでに、動き出していた。

009 喋影プロボケーション／お前のマケだ

現在、エアバイクを使用してひったくり犯は逃走中だった。

見廻組への通報もあって、すぐさま出動した彼らから上手く逃げ切り、人気のない路地裏にエアバイクを駐車し、老朽化しているアパートの裏口のドアを強引に蹴り開け、中に入っていた。

だが、ひったくり犯は完全に逃げ切れていなかった。

彼の行動をしっかりとチェックしている者が居たのだ。

それも――三人。

そんなことには気づかないひったくり犯は、ひったくった革鞆の中身を漁り始め、財布を見つけると、急いで中身を取り出した。現金三万円が入っていた。

「上出来だ」

三万円手にしつぶやいた彼は、その他にクレジットカードや会員証カードなど取り出していった。空っぽになった財布を投げ捨てると、革鞆の中に他に価値のあるものがないか探り始めた。

男は無我夢中に、ひたすら盗みを働く事に、勢いを増していた。

その時だった――男の入ってきた裏口のドアが、思いっきり開かれた。

外からやって来たのは、二人の少女だった。

一人は厳しい表情をしながら、タブレット端末を握り締めている。

もう一人は、少し逃げ腰になりながらも、ひったくり犯に対する嫌悪感を顔であらわにしている。

「その鞆、返して下さい……！」

少女・統夏菜が、一歩踏み出した。

ひったくり犯は動揺しながら、必死に鞆を抱きしめた。

「な、なんで此処に！　なんで……な、なんだよお前ら！？」

「追って来ました。貴方の逃走経路は手の中にありましたから、エアバイクに追いつくのは難しくても、止まっている相手なら追いつ

くことは簡単です」

「か、観念しろい！ このひったくり野郎！！」

夏菜の隣で、美純も大声を出しながら一步前に出た。

「観念して下さい、貴方が奪ったお婆さんの鞆、返してもらいますよ」

夏菜は冷静な態度のまま、徐々に男へと近づいていく。

しかしその足取りが、妙に震えている事にひったくり犯は気づいた。

そこで彼は、内ポケットにしまっていた拳銃を咄嗟に取り、銃口を夏菜に向けた。

「……！？」

「な、夏菜！！」

少女二人は目を見開いた。同時に美純は顔が青ざめた。

夏菜に向けられた銃口は、わずかに震えを保ちながら、だが確実に少女の身体を捉えている。

「ど、どうだ、凄いだろ……こいつはただの拳銃じゃねえ。デュフューズガンだ！ 榴散弾を撃つことが出来るんだよ……！ ……」

…う、動くんじゃないぞ。動いたら撃つぞ！」

「……………」

「……夏菜」

初めて銃口を向けられた夏菜は、先ほどの悪に対する憤怒が一気に冷めて、突如として生まれた恐怖感に心身共に蝕まれてしまった。

美純もまた、親友が死に直面していることを察し、他人事とは思えないような臨場感に浸っていた。夏菜が撃たれば、自分も撃たれる、そのような思考を嫌でもしていた。

「良いか……そのまま地面に横になれ、横になるんだ……とつとひれ伏せエッ！！」

ひったくり犯は怒声を投げる。

少女二人はその怒声による脅迫に耐え切れず、ゆっくりと地面に

倒れた。

常時銃口を向けられている夏菜は、より一層恐怖を味わっていた。同時に様々な感情が彼女の頭を駆け回っていた。

後悔や恐怖心、正義心や自分の弱さの嘆き……いろいろな感情が夏菜を襲っていた。

美純もまた、自分の軽率な言動に後悔を持っていた。余計な事を言ったから、相手の怒りを自分が一番買ってしまったのではないかと過剰に思っていた。

「……いいか、そのままじっとしてろ……！」

ひったくり犯は逃げようと、裏口へと足を進めていた。彼女らがすぐそこに居るため、慎重に足運びをしていた。依然としてデュフューズガンの銃口は夏菜に向けられている。

そのまま彼は裏口のドアを潜ろうと足を前に出した——その時——

「なんだよ、逃げるのかよ」

どこからともなく、その声は現れた。

「とっととそいつら殺して、その後に逃げればいいじゃないか」

未知なる人物の音源は、ひったくり犯のいるフロアより一個上のフロアからのものだった。

天井のない二階フロアの、柵に腰を掛けたその人物は、ニタツと嘲るように言う。

「脅しだけで済ませるなよ。今そこにいる二人の女の子達を殺せば、これから先逃亡が楽になるんだぜ」

「だ、誰だお前は!？」

ひったくり犯の男は慌てふためきながら、デュフューズガンを未知なる人物へと向ける。

「誰って……、そうさな、簡単に自己紹介を済ますならば——人殺しだよ」

その男——黒いコートに身を包み、不気味な笑みを浮かべながら、

嘲る様な態度を示す。

洞岳謙戯だ。

「やれ殺人鬼だシリアルキラーだ呼ばれているが、やっぱり人殺しって呼び名のほうがしっくり来るね。どうだい”人殺し”、お前もそう呼ばれたくないか？」

「……あ、な、何言ってるんだお前は……!!」

「とぼけるなよ」

謙戯は笑った。

「——お前、さっき人殺したろ」

謙戯は、右手で拳銃の形を作り、それを自らの頭に押し付けて、引き金を弾くような動作を真似た。

同時に「ばーん」と擬音語をわざとらしく口に出した。

「その銃で、セレブなオーラを醸し出していたお婆さんの頭、撃ちぬいただろ」

「な、なんでお前……!?!」

ひったくり犯の顔が急に青ざめた。

夏菜と美純は、起こっている現状にやや理解が追いつかず、話に上手く思考回路が回らなかった。

「血のニオイがするぜ、——かつ、こういう台詞言ってみたかったんだよ! ああまあ冗談だけど。実際のところいうと、たまたま偶然、奇跡的に俺はお前がお婆さん殺すところ見てたんだよ」

「み、見てたって……トイレには誰も居なかったぞっ!!」

「へー、トイレで殺したのか。趣味が悪いな。人様殺すんだったら、死に場所ぐらい豪華にしてやれよ。小便臭いトイレなんぞで殺すなよ」

「……は、はあ!?!」

ひったくり犯の動揺ぶりに、謙戯は笑いを出すほかなかった。

「あははははははははっ!!」

「な、何が可笑しいんだよ!!」

「いや、悪いな、さっきは嘘ついた。別に俺はお前がお婆さん殺す

「ところなんて見てないさ」

「……じゃあどうして……俺がババア殺したって……」

「正直に言えば――血の匂いだよ、結局はね」

「なに？」

[illegible]

「……それだけじゃ話にならないだろオッ!!」

「あ？」

「お前は、俺が殺したババアの詳細まで知ってたじゃないか!!
なんでだよ!　なんで分かってんだよ!!」

ひったくり犯は銃口を前へ前へ突き出しながら叫んだ。

謙戯は再び、嘲る。

「そこまで詳しく喋らなあかんのか。……お前がトイレから出たところを見たんだよ俺は。そしたら血の匂いがしてきたわけさ。気になって女子トイレ入ってみれば、三つ目の便器に、脳天撃たれたお婆さんが、しかもセレブみたいなお婆さんが死んでいた。面白そうだからお前の後を追ったのさ」

「……おも、面白、い？」

「それ、銃声のしない銃だろ。おまけに弾丸が飛び散る仕組みらしいな。そんな銃見たことないぜ。面白いモノ持つてるから、ついてきてこの目で確認したかっただけだ」

言って謙戯は、二階から飛び降り、一階フロアの地面へと着地した。

「どうだ、さっさとあの二人撃ち殺してくれよ。この目で見てみたいぜ」

ひったくり犯は、やや呆れ、やや恐怖した。

銃口は、謙戯に向けられる事なく、地面へと向いていた。

「な、何言ってるんだお前。……殺せとか、何言ってるんのホントに……」

「何言ってるのはこっちの台詞だぜ。戸惑う必要が何処にある？」

お前は合理的に判断すればいいのさ。——警察よりも早く自分を追い詰めた人間は、か弱い女の子二人だけ。殺すことなど容易い。殺せば、逃げることなど簡単じゃないか。ひったくりしてしまったために追いかけられたんだぜ。厄介ごとは背負わずに、さっさと殺せよ」

「……う、うるさい!!」

「ひったくりしたことを後悔してるか？　しょうがないわな。殺したお婆さん、一万も持っていない貧乏人だったからな。金持ちつつう意地を張ったフェイクに過ぎなかったんだもの。人一人殺したんだ、どうせなら大金は手にしておきたいだろうし、あそこでひったくりを犯すことは妥当だぜ」

「どうせなら、その女の子二人殺して、そつから金を奪うことも可能さ。ええ？　どうだよ？　殺すか、殺さないか」

デュフューズガンが震えながらも、しかし銃口は謙戯を捉えている。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

夏菜は冷や汗を掻き、美純は恐怖心に心奪われ、必死に逃げようと思つても、身体が言うことをきかず、そのまま地面にうつぶせであるほかなかった。

彼の背後で、謙戯は笑うこともせず、無表情のままその様子を眺めていた。

ひったくり犯は銃を再度握りしめ、しっかりと銃口を夏菜に向けた。

ひったくり犯は——引き金を引こうとした——

「統さん！ 江堂さん！」

その声はひったくり犯の指先を止めた。同時に彼の持つデュフューズガンの銃口が、瞬時にその声の主へと向けられた。

「ああああああッ！！」

ひったくり犯は、突然現れたその”少女”に銃口を向けたまま、引き金を――

「駄目だ。お前の死だ^{まけ}」

――引けなかった。

引き金を引けずに、ひったくり犯の、デュフューズガンを握る右手首が、ぽとと地面に落ちた。

「……え、あ、……え？」

呆然と、そして慄然していく――ひったくり犯の顔は更に青白く染まっていく、だが、彼の”右手首のあった部位”からは、真っ赤な液体が流れるばかりだった。

ひったくり犯は、ゆっくりと後ろを振り向く。

そこに立っていたのは、

「人を殺すこと、それにおいて最ものタブーは――躊躇う事」

”黒い何か”が右手に絡まった――洞岳謙戯の姿だった。

「人を殺めたその右手、俺がひったくって、否、切り落としてやりました」

言って謙戯は右手を振り上げた。

同時に――ひったくり犯の身体がまっぴたつに裂けた。

黒い影が、刃物のように形を作り、ひったくり犯を斬殺した。影質操作によるものだった。

「……」

ひったくり犯は無言のまま。

半分半分の身体が地面へと倒れていく。

ぽとりと倒れ落ちた。

後に残ったのは、一人の人殺しと、死体、そして少女二人と、――
――怒りの顔を見せる少女・勇梅終いさめしゅうだった。

「アンタ……！」

いつもは長い髪を橙色のリボンで纏め、それを右肩の前に垂らしている勇梅終。

そんな彼女が、今回は髪を整えることもなく、寝ぐせの目立つ長い髪を背中に垂らしたままでいた。

「アンタねえッッ！！」

「やめろ。うるさい」

謙戯は淡々と述べて、彼女に背を向けた。

「ちよっと待ちなさいッッ！！」

勇梅終は、スカートの下の右脚部分に装着していた武装機械を急いで起動した。それは『脚力加速アクセルスピード』。人間の脚力に特殊エンジンを加えるものだった。

しかし、

彼女が走りだそうとした時、

「……い、ない……！！？」

そこに、洞岳謙戯の姿は無かった。

010 遭遇アブノーマルノイド／老人と集団と白いコート

謙戯が異世界に来て一週間が経った。

未だこの世界を把握出来ずに居る彼は、それでも食って寝るとい
う生活要素だけは簡単にクリア出来るほど、世界への慣れというも
のは素晴らしいものだった。

といっても、強引に食料を奪ったり、寝具を盗み取ったりと、や
っていることは犯罪レベルであるから、誇っていいものではない。

「しかし、いつまでもこうしているわけにはいかないよな……」

午後九時過ぎ。

虹色のバリエーションを持つ街灯に照らされ続けている公園のブ
ランコに乗りながら、謙戯は小さく呟いた。

後に吐いた吐息は、先の見えない不安感と、現状理解出来ない自
分の知識の浅さに対する若干の怒りが混じっていた。

残念なことに、前々から持っていた携帯電話はこの世界ではガラ
クタに等しく、使うことはおろか電源すら入らない。

現在時刻を確認するのも、わざわざ街中の時計を探したりする。

面倒な生活、であることは間違いない。そんな生活から一刻も早
く抜け出したいと切実に願う一方で、殺人鬼としての行動が普段よ
りも大幅に少ない事に、やや安堵感を持っていた。

彼らしくない心持ちだった。

殺人鬼としての意志が、やや薄れてきている証拠だった。

謙戯は自分の掌を見て、そして強く握りしめた。

「歯がゆいな。……何が起きてるってんだ」

苦虫を噛み潰したような顔を示した。

納得できない現状に、謙戯はもはや追求する気も起きずにいた。

どうしようもなく現在に否定的な態度をとっていても、それを打破
する解決策が見つからない以上、彼の不満や不安が消えることはな
い。

それでも、それでもなお彼が憤怒の感情に流されずにいるのは、殺人鬼としての素質からか、何事にも対する許容範囲が大きいからだ。

願望は持つても、追求する気力は湧かない。

「……………寝るか」

謙戯は考える事をやめた。

いい加減、もう諦めるのはどうだろうか、いやそういうわけにはいかない、と自問自答している自分に呆れたのか、はたまた本当に考えることに飽きを感じ諦める事にしたのか、事の真偽は謙戯の心の闇の中に溶け込んでいき、彼自身もまた自身の感情に理解出来ないまま、睡眠する、といういわば無意識になる行為——逃げ、に転じたようとした。

ブランコから降り、寝具のおいてあるジャングルジムの下に足を運んだ謙戯は、二メートルあるその寝具——寝袋を両手で持ち上げ、ゆっくりと眠れそうなところを探そうと周囲を見渡した。

この公園は案外広く、ここから出るには二〇〇メートル歩かなければならない。公園の中心は木々が広がっており、所謂森林公園と称されている場所だった。

「木陰で眠ろうか」

いつ襲われたとしても、謙戯には殺気を感じ取る感性がある。

殺人鬼として基本的なものだ。

だからこそ、目立つような所で寝たとしても、実際は彼にとって危機感の感じ方に変わりはない。

安全な場所で眠ったほうが、快眠はしやすいが。

しかし、その時である。

謙戯が寝袋を下に敷いた時、後方で草むらがざわめきを起こした。ざざつ、という奇妙な音に、謙戯はすぐに反応し、首を音のする方へ捻った。

しかし、先の草むらには誰もおらず、ただただ虹色の光に照らされた草木が目立っているだけだった。

視界だけでは、

視界だけでは――そうとしか確認できないだろう。

だが、謙戯は、視界だけでなく、聴覚、嗅覚、他すべての感覚を駆使し、そこにいる存在を感じ取った。

「……誰だ。……そこで隠れて何してる」

問いかけの先は草木だった。

だが、その草木が言葉を返す。

「……気づかれましたか」

言って草むらから姿を表したのは、白髪頭の老人だった。青い患者用の服のようなものを着用しており、やや曲がった腰で、とぼとぼと前へと進みだした。

「すみません、驚かせてしまいましたでしょうか」

老人の態度はやけに紳士的だった。隠れていた割には、だが。

これには謙戯も、敬語を使う癖が発動してしまい、

「え、いや、大丈夫ですよ」

と軽く頭を下げながら苦笑いと言った。

「おじいさん、ここで何してたんです？」

謙戯はすかさず疑問を投げかける。

「……ええ、それがですね、お仲間さん達とはぐれてしまいました……、迷ってしまったようです」

「お仲間さん？」

「ええ、大切なお仲間です。先ほどまで一緒に居たのですが……気づけばはぐれていました」

「でも、おじいさん……どうしてそこに隠れてたんです？」

謙戯は老人の隠れていた草むらを指して言った。

「……言うならば、隠れるべき身でありますので」

老人は顔を俯かせながら言った。

謙戯は、眉をひそめて、

「”隠れるべき身”？」

その単語だけをチョイスし、再び疑問を投げかけた。

その瞬間――

一瞬のうちに、謙戯と老人を囲むように、老人と同じ服装をした人間たちが草木の陰から現れた。

その気配に気づいていなかった謙戯は思わず目を見開いた。

しかし瞬時に体勢を整え、殺気じみた目付きを、周囲に向けた。

「誰だ貴様……名を名乗れ」

唐突に、一人の男が口を開いた。顎鬚をたくわえた、目付きの悪い短髪の男だ。

右手には、拳銃を握っており、しかしその銃口を謙戯に向けることはなかった。

「……誰だお前ら」

謙戯は男の握る銃を見つめながら言った。

「それ訊いたのはこっちなんだよ。爺さんになんか用か？　ないんならさっさと失せな」

「お前らこそ、おじいさんに何の用なのさ。物騒なもの持ちやがって、お前らもテロリストとかいわねーだろうな」

「テロリスト？　ほざけ」

短髪の男は老人に近づいていき、彼の腕を引っ張った。

「じいさん、あれほど勝手な行動はよしてくれと言ったじゃないか」

「……すみません、気づいたらはぐれていたのです」

「これで四度目だ。五度目は勘弁してくれ」

短髪の男と老人のやり取りに、謙戯は首を傾げたままだった。

疑念を抱いた謙戯は短髪の男の背中に向けて質問する。

「ちょっとまってくれ。どういうことだよ？」

「どうもこうも、貴様には関係のないことだろ。さっさと失せろ。

俺達に関わるんじゃないやねえ」

「そんなこと言える口か？　俺を数十人で囲んでおいて、関係のない事とは言えたもんだぜ。――なに、これから俺を集団いじめでもするのか？」

「おやめください……！」

そこで、割って入って声を出したのは、老人だった。

突然の介入者に、謙戯は素直に驚いていた。

「この人達が私のお仲間さんなんです」

老人は、周囲の連中を見ながら言った。

「……お仲間……?」

「はい。私達は脱^{だつ}ご——」

「じいさん」

老人の口を、短髪の男が手で押さえた。老人が最後まで言おうと
していた事は、言ってはならないことだったらしい。

短髪の男は謙戯に目を向けて、

「ガキ、俺達は影のように生き、陰に生きている。関わらないこと
をオススメする。分かったらとっと失せろ」

そしてようやく、右手に握っていた拳銃の銃口を、謙戯に向けた。
だが、謙戯は嘲る。

「は、っは、はっははっ、っは。……お前からは殺意を感じ取れな
いな。その銃は、実弾が入っていても、引き金を引くことはしない
んだろう。どういう連中かはわからないが、どこぞのテロ組織とは
また違う組織のようだな」

——殺気がねーぜ、と謙戯は言った。

「いいさ。失せるよ。俺も別にお前らとかかわる気はないさ。ただ
寝床が見つからなくてイライラしているんだよ。なあ、良い野宿場
所なんてところ、知らないか?」

「さーな」

短髪の男は即答した。

そうかい、と謙戯は呟き、肩をすくめた。

「もう少し優しくなれよ。他の殺人鬼^{やっら}が癪に障れば、お前らすぐに
殺されるぜ」

手で拳銃の形をつくり、バーンと擬音語を発生して銃を撃つ素振
りを見せる謙戯。

それを静かに見つめる老人と、短髪の男。

お互い争うこともせず、静かに会話劇は——幕を、閉じようと——していた——

「みーつつけた、と言っても良いのでしょうか」

唐突に。

突如として。

謙戯から一〇メートル離れた樹木の上に、一人の男が顔を見せた。白いコートが風になびいていた。

その男の登場は、まるで何かの前兆を示しているかのようだった。天然パーマの頭を掻きながら、男は高さ八メートルから優雅に地面へと舞い降りた。

言葉通りだった。

ゆっくりと、地上に降りていった。

「……………なんだ……………」

謙戯も思わず口にした。

不可思議な現象に、謙戯は勿論老人も短髪の男も、その他の連中も驚きを隠せなかった。

「探しましたよ、ホラオカケンギ君、ですか。顔だけで探すのには骨が折れましたよ。なに、一週間で見つけたというのはなかなかの上出来です、私は偉いですね。…………さて、ホラオカケンギ君、君に会いにきたんですよ私。もっと歓迎してもよいでしょう。なんですかそのぶっきらぼうな表情は。もっとにこにことしたスマイルを私に向けて下さい」

白コートの語りが終わると同時に、周囲の木陰から、ぞくぞくと武装した人間たちが揃って歩み寄ってきた。

謙戯と、老人を含んだ連中は、それらに囲まれるという結果になった。

「…………そんな顰めっ面はよしてください、ホラオカケンギ君」

「なに、顰めっ面はしてないさ、どこぞの誰かさん」

「おや、そうですか。私からしてみれば、特に怯えている様子もなく、ただ——そこにいるだけの存在を——凝視しているに伴い顰めた顔を見せているようにしか見えないのですがね。いやあ、私に恐怖することもなくそうやって見つめているとなると、やはり貴方は只者じゃあないようですね。なにせ——あの朱雀百華をいとも簡単に破壊したのだから」

「……………お前」

「ホラオカケンギ君、君を——」

男は、目を見開いた。

その右目。

男の右目は、眼球が緑色に染まっている。

足のかかと部分には、武装機械が“装着”されているのではなく、“埋めこまれて”いる。

「——殺しに来ました」

此処に。

洞岳謙戯の前に。

アフノーマルノイドくじゅういんはく
改造人間、九重院白が参上した時だった。

011 黒纏キラー／電撃メタル

「殺しに来たとは面白い。俺は貴方に何かした覚えがサラサラないんですけど。それでもなんですか、無実の罪で俺を無理やり殺すとか滑稽なことでもするのでしょいか」

「――私は先程、貴方は朱雀百華をいとも簡単に破壊したのだから――と述べました。この言葉の意味が理解できて欲しいですねえ」
「……あのバビロンとかいう連中か。確かに服装も似てる。……それに貴方は、どこか変だ。人とは思えない体格をしてらっしゃる」
「改造人間、をご存知ですか？ 噂としては聞いたことがあるでしょう」

謙戯は首を横に振った。

「知らん。生憎この世界での知識は薄いんですよ」

「……意味深な発言は置いときましょう。……さて、改造人間を知らないとなると、まずは簡単に説明すべきなんでしょうね」

「いや、結構」

その瞬間――

謙戯は影質操作で足元の影から腕のような形状をした影質を造り、それを一気に九重院の方へ伸ばした。

しかし、伸びた影を、九重院は瞬間的な速さで避け、謙戯との距離をそれで縮めた。

影質の腕は、伸びたまま、虚空にじっと固まっていた。

九重院はそれに関心のある目で見つめながら言う。

「面白い、実に面白いですね。これはもう――武装機械の代物とは言えない。さてはそれ以外の何かなのでしょうか。いやあ、実際に見てみるとたまげますよ。なんですかその”黒いモノ”は？ 異常現象ですか」

謙戯は攻撃を避けられたことに大して疑念を抱くことはなかった。ただ、相手の動きの違和感に若干首を傾げるだけだった。

「……人の動きじゃあ、ないようですけど。貴方、なんか身体に仕込んでたりしますか？」

「勘が良い。貴方は洞察力も素晴らしいですね。——先ほど改造人間のことを述べたままに終わりましたが、今の私の動きは、かかと部分に埋めこんである『アクセルスピード脚力加速』と、足全体に内蔵されてある『デッドソニック超加速死線』のコンビネーションから生まれた『オーバーラン超加速走』ですよ。一歩間違えれば足の筋肉が破裂するぐらいリスクの高い動きですけどね。貴方のような方には、これぐらいしないと同等とも言えないでしょうし……」

「機械を身体に埋め込んでるってか。まるで」奇怪堂のオタク野郎
”みてーだぜ”

「はい？」

「いや、こちらの話だよ。にしても、なんだ、貴方のその身体、全てが全て機械に補助されているとなると、いわばそれが改造人間というネーミングの由来なわけですね」

ええ、と九重院は言って、右手を顔の前に出した。

すると、彼の右手首が腕から離れ、そこから鉄の線が右手の指に絡みつくように現れた。やがて鉄の線は彼の右手の指全てに絡み、白色だった鋼の右手が銀色に変わった。

「これは——『ボルトハンド』というものでして、常時十万ボルトを帯びています。電流の値に変わりはないですから、即死レベルのものではないですよ。——ただこのボルトハンド、帯電機能を持っていますね、更にはそれを放電することも可能なんですよ」

言った直後、

九重院の右手からばちばちと火花が散ったかと思うと、瞬く間にそこから青白い光が辺りに舞った。

周囲の人間に直接当たることはなかった。が、脅しの意味では十分に効いていた。

「……」

「次は当てますよ」

「……………」

九重院の宣言に、謙戯は沈黙で答えた。

僅かな沈黙をつくり、そのあと影質操作で作っていた”影質の腕”を操ろうとした時、

バンッ、と銃声が鳴り響いた。

瞬時に謙戯は銃声のする方へ目を向けた。

そこには、脳天を撃ちぬかれた、青い患者用のような服装をまとった男がゆっくりと倒れていくシーンがあった。

ばたりと地面に男が倒れると同時に、短髪の男が叫び、その他の連中も動揺を隠せずに悲鳴を上げた。

銃を撃ったのは、九重院が連れてきたバビロンの一人だ。

「ああ、そういえば、邪魔な人間は適当に殺して良いと言ってたっけ。すっかり忘れてました。どうぞどうぞ、お好きに殺して結構ですよ」

九重院は手をぽんと叩いて言った。

その言葉に、老人やその仲間たちは一斉に顔を引きつらせた。

だが、

バビロンの武装連中は、銃の引き金を引く事をせず、じっとその場に立っているだけだった。

「……どうされま——ッ!？」

九重院は一気に青ざめた。

無理もない。

確かに数秒前まで生きていたはずの同胞が、すでに——死んでいたからだ。もっと正確に言うなら、殺されていたというべきだろう。

「……殺すべき人間というものには、価値があるだろう」

影質を右手に纏い、黒く染まったそれを真横に上げた状態で、謙戯は呟いた。

そしてその腕を、勢いよく真上に伸ばす。

それに呼応するかのように、地面から黒い影——影質——が一気に上空に生えてきた。

先端が鋭利さを連想させるほど尖ったそれは、ところどころ血の付いているものもあった。

「無差別殺人なんていうのは、まさに愚行だよ。殺人にだって美学はあるのさ。人を殺すという選択的行為だって、人生には一つや二つ目の前に現れるさ。そこで、どうやって殺すか、はたまた殺さずにどう対応するか、それが人間の精神的状況下における究極を決する判断——決断だぜ。だが無差別殺人というのは、いかんせん美学がなくて汚らしい。確かにその行為にだって個人にとっては何らかの決断があり美学を感じ取れるモノである可能性はあったかもしれないさ、だが、殺人というのは至って簡単な行いであって、単に命を奪う行為そのものだ。無差別となると、殺した相手すら確認できないままに終わるだろう。殺されたヤツの気持ちを考えてみるよ。貴方達にはわかるまい。現にこうして周囲の連中を殺そうとした、が、それは余りに無意味で無鉄砲かつ無価値な行動だ。——大切なのは価値のある行いすなわち価値ある人間を殺すかどうかだ。今そこにいる連中は、価値がない。殺される価値というのはつまり、死ぬべき人間か、どうでもいい人間かだ」

「……はて、何を仰りたいのやら。びっくりしました。貴方が急に語りだすから……」

「いや、つまり簡潔にまとめるとですね」

「先にそうして下さい」

「——貴方には殺す価値が十分にあるということなんですよ」

先に動いたのは謙戯だった。

言葉の終わりを皮切りに、彼は地面を蹴って九重院の下へかけ出した。同時に周囲にあった影質が謙戯の右腕に戻っていき、彼の腕がより一層黒に染まった。

謙戯の右腕から大鎌のような形状が生え、それを身体の前に構えた状態で九重院に突っ込む。

しかし、九重院は超加速走で謙戯の突進を余裕で避けた。
オーバーラン

だが、九重院が身体を右に移動させた直後の僅かな隙、謙戯はそ

影はみるみる消えていき、謙戯の影質操作は一時機能停止した。

「幾ら改造人間でも、朱雀百華の上をいっていると言ってもですね、貴方のような怪奇な存在には、敵う敵わないという問題定義は曖昧になるのですよ。なにせ、未知なる力をお持ちなのですから」

「言っておくが、俺にとってはその機械のほうが未知なる力ってやつだぜ」

「――では、その未知なる力の最高峰をお見せしましょう」

その時、九重院の右目の色彩が緑から青に変わった。すると、もう片方の眼球も青色に変わっていった。

「『アブソリュートモード』」

九重院が呟いた時。

謙戯が構えた瞬間には、彼の視界にそこに居たはずの九重院の姿は消えていた。

そう。

九重院はすでに、謙戯の背後に、立っていた。

「――ッ!？」

「これが超加速走を超えたスピード、オーバーラン『神速走』アブソリュートラン」

謙戯が振り向いたその時、彼の頬に電気を帯びた鉄拳がめり込んだ。

九重院のボルトハンドが完璧に命中した。

攻撃を食らった際に、謙戯の身体に一気に電流が流れる。しかし謙戯は倒れる事なく、ただ絶大なダメージは負いながらも、次の攻撃に備えるために必死に立っていた。

「貴方がその未知なる力を駆使しても、要は――それに命中しなければ良い話なのですよ」

九重院の神速走に、アブソリュートラン謙戯は追いつくことが出来なかった。

あらゆる所から九重院の電撃の拳を浴び、普通に立っていられることがおかしいくらい、オーバーラン謙戯はダメージを負っていた。

九重院の動きは確かに超加速走を上回っていた。どこが違うといえば、まず一目瞭然なのが、目で追えないほどのスピードに変わった。

ていることだ。まるで瞬間移動と言ってもおかしくはないほどに。

「朱雀百華の敗因は、恐らく敵の攻撃を避けるためのスキルが具備していなかったことでしょ」

「……………」

「朱雀百華は攻撃メインに造られた、いわば朱雀百華に勝る力を持つものが居ないという前提でしたからねえ」

「……………」

「貴方や、あのテロ組織達は朱雀百華を倒して喜んでいるのでしょうか。もしそうであるなら悲しい事です。オーバーデッド社は、あれ以上のバトルスーツを、大量に隠し込んでいますから」

「……………」

「さて、仕上げとしましょう」

九重院の連続攻撃に手も足もでない謙戯は、ただ必死に堪えるだけだった。

「『エレキレーザー』」

九重院はそう言い、鋼の右手を前に突き出した。

手の指の先端から青白い光が一点に集中し、ばちばちと火花を散らせている。

謙戯は、その様子をただ眺めるだけだった。

避けようともせず、ただ見つめるだけ。

「レベルガン、に劣る代物ですが——十分死に至るレベルですよ」

エレキレーザー。

九重院の体内に埋め込まれたモーターによる発電で、指先に電気を蓄え、それをレーザー放出するというプロセスを通った技の一つ。

まともにこれを食らうと、死ぬのは当たり前だ。

電気の威力が、ボルトハンドの倍以上だからだ。

「では——GOOD LUCK」

流暢な発音をし、九重院は顔をにやけさせた。

そして、指先から——青白い光線が謙戯に向けて発射された。

「所詮電気」

しかし。

電撃の一線は、謙戯の身体を貫通することなく、虚空に消えた。否、消えたというより、吸い込まれたと表現すべきだ。

そこに、そこには、黒い影が、謙戯を守るように立ちはだかつていた。

「電気相手に、死ぬほど雑魚なキャラではないよ、俺は」

謙戯の腕に黒い影が絡み付いていた。

謙戯の顔に、黒い影が忍び寄っていた。

その影は、やがて謙戯の右目にたどり着き、彼の顔半分を真っ黒に染めていった。

そして。

彼の白目は黒く染まり。

彼の瞳が赤く染まる。

影質操作・禁断能力『黒纏い』。

殺人鬼の本気の一部が、発動された、

「……………なん、ですか、それは……………!？」

九重院は本気で驚愕していた。

無理もなからう。目の前に、黒に染まり掛けた男が立っているのだから。

痛む姿も、苦しむ表情も見せず、ただただ九重院自身を見つめているだけの、顔。

「殺す」

謙戯は言った。

黒い影が、笑った。

012 禁断ブラックドレス／脱獄連合

禁断能力『黒纏い』。

洞岳謙戯の持つ能力『影質操作』を使った進化的能力である。

名の通り、――黒を纏う。

黒とはつまり影であり、纏うとはつまり影を身体に染みこまされる事そのままである。

影質化された影を纏う事で、身体の皮膚の色彩に変化をもたらす。この場合黒色の皮膚に変化していくが、同時に眼球の色素に黒色と血液の赤色が混じり、白目が黒く染まり、瞳が赤くなる。これは『黒纏い』特有の身体変化によるもので、謙戯自身には何ら影響はない。

影がまとった身体は、いわば影質と同様の構造をしており、例えば銃弾が身体に命中しても、別空間へと繋がった（ブラックホールのようなもの）へと銃弾が流されるだけで、直接身体にダメージは受けない。

すなわち、一切の攻撃を受けない――防御型の能力だ。

謙戯は、黒纏いをした状態で、影質を使った大鎌を作る。右手にそびえたそれを、謙戯は更に影質操作で巨大化させ、全長十メートルに及ぶ巨大な黒い鎌が完成した。

その様子に慄然している九重院は、ただただ見つめるだけしかなかった。

しかし、しばししてから彼は己の状況下を理解し、すぐさま攻撃態勢に移った。

九重院のとった選択は、攻撃兼回避の行動だ。ボルトレーザーは充電時間まで撃つことができない。しかも、ボルトレーザーの分の電気を消費してしまっているので、微量の電気しか体内に貯蓄出来ていない。だから、少量の電気を帯電された状態でありボルトハンドを使う手もある。が、謙戯の現在の姿を見ると、迂闊に近づ

くことは自身に危険性を及ぼす可能性が大なので、此処は遠距離攻撃であるマシンガン連射の攻撃行為をすると共に、敵の攻撃を避けるために常時神速走アブソリュートランを使用することに決めた。

九重院はすぐさま右肘部分に装着していた立方体の箱を手に取り、掌でそれを起動した。

箱はすぐさま一つのエンブレムへと変わった。それを取り、右手の甲にあるそのエンブレムの形をした穴にはめた。直後、左腕から銃口が三つ生えるように現れた。

九重院は銃撃を開始した。同時に敵の攻撃を回避するために無闇矢鱈に動き出した。

だが、放たれた弾丸は、決まって謙戯にダメージを負わせることはない。

全て黒纏いの影に飲み込まれるだけである。

（これでは埒があかない！）

九重院は多少の焦りを持ちながらも、それでも必死に銃撃をやめることはなかった。

距離を長く取りながらの銃撃戦。

謙戯は赤い瞳で九重院を見つめるだけで、反撃をしようとはしなかった。

その様子を見てか、九重院は少し距離を縮めて、マシンガンの連射時間を更に短くし、弾丸の発射数をかなり増やした。

しかしそれは意味がない。

そんなことを理解していても、九重院は攻撃するという行為を止めるわけには行かなかった。

やめたら、終わり。

不気味な姿を見せる敵に、一瞬でも隙を見せたら、そこで死が確定する。何故か九重院は、そんな、嫌な予感を頭において、必死にそれを誤魔化すために攻撃するという選択を、全肯定してしまっていた。

敗北を認めるかのような思考だった。

そんな思考を頭の片隅で思い当たった瞬間――
黒色の悪魔が、とうとう動き出した。

「お前は死ね」

うひゃひゃひゃひゃひゃ、と奇声を上げて。

謙戯は腕に生やした黒い大鎌を九重院に向けて大きく振った。

黒き刀身は、九重院に十分届く範囲だった。

しかし常時神速走アブソリュートランを使用している彼は、その攻撃をなんとか回避することに成功した。

だが、暇なく謙戯は攻撃を繰り返した。

謙戯の足元にあった影を影質操作で操り、蛇のように生きている影を九重院の足元に一気に忍ばせた。

瞬間的にその存在に気づいた九重院は、足に装着している脚力加イクセルスビ速イドのエンジンを応用し、地面を蹴って空中に飛躍した。

蛇の如き影は虚空に消えたが、大きな隙を作った九重院は、第三の攻撃に構える余裕が皆無だった。

九重院の目前に、黒纏いの謙戯の顔があった。

赤い瞳を見開いて、彼はゆっくりと言う。

「善く死ぬことに感謝しろよ」

謙戯は大きく振り上げた踵を、九重院の後頭部にぶつけ、彼を地面にたたき落とした。

瞬時に九重院のもとへ降り立ち、最後の決め手を行おうとした時、九重院の神速走アブソリュートランが発揮され、彼は足で地面を蹴っただけで謙戯から二〇メートルは離れた。

そして九重院は太腿の裏部分に取り付けていた、鋼の球体を手に取り、それを謙戯に向けて投げつけた。

「あ……?」

謙戯がそれを疑問視した時、球体から白煙が上がり始めた。

数秒で此処の公園を一気に包みこむかのような量の白煙が放出され、そこにいる人間の視界は真っ白となった。

謙戯は影質で作った鎌で煙を払い、自分の視界を明瞭にした。同時に鋼の球体を踏みつぶした。

「……」

謙戯の視界に、アフノーマルノイド改造人間の姿はなかった。近くにその気配もなかった。

やがて白煙が消え去り、辺りは再び虹色の光に照らされた公園となった。

先ほどまで五月蠅かったこの場所が、一気に静寂へと変わった。

この場所には、黒纏いの謙戯と、青色の服を着た集団が居るだけで、あとは、白いコートを着た死体が転がっているだけだ。

勿論、九重院の姿はない。

彼は白煙で謙戯の視界を遮り、アフソリユートラン神速走で逃走に成功したのだ。

謙戯はそれを理解し、舌打ちをした。やがて段々と彼を纏っていた黒い影が消えていき、彼の眼の色も正常となった。

「……な、何なんだお前……!？」

と、静寂の中で一人の男が震えた声を上げた。

青色の服を着た短髪の男だった。

見開いた目を謙戯に向けている。

「何って、何だよ」

謙戯は目だけをぎろりと短髪の男に向けた。

「そんなに驚くような事したか？ いいやしてないぜ。幽霊でも見たような顔しやがって。こっちが逆に驚き——ますよ」

「脱獄連合？」だつごく

「はい、名前の通り脱獄してきた人々の集まりなので、皆そう言っています」

「それは、君たちで決めたのかな？」

「はい、というより、リーダーのルーベさんがそう名乗っていたので」

「名乗る？」

「はい、時々遭うんです、犯罪者とかに。その時にリーダーがカッコつけて『脱獄連合だ、おとなしくしろ』とか言うんです」

「ふーん……」

洞岳謙戯は納得したかのような顔を見せた。

その様子に、彼の会話相手である少女が応える。

「あの、じゃあ、私洞岳さんの質問に答えたので、今度は洞岳さんが私の質問に答えてくださいね」

その少女、名は投刀塚風子なたつかふうしという。三つ編みを後ろに垂らしたヘアスタイルで、少し小柄な体格をした少女だ。ぱちくりと開いた大きな目で、壁にもたれる謙戯の顔を見上げている。

洞岳謙戯が何故投刀塚風子という少女と会話しているのか。

まずは、彼女が脱獄連合という集団の一人であることを前提に説明するならば、謙戯が公園で出会った青色の服装を着た集団こそが脱獄連合であり、謙戯と改造人間アフノーマルノイドとの闘いのあとに、謙戯が強引に彼らに着いていったことから始まる。

その後彼は脱獄連合に恐れられ、罵声や暴言を浴びるが、気にすることなく、適当に彼らの近くに立っていたところを、この投刀塚風子という少女に捕まったというところだ。

彼女が何故謙戯に話しかけたかというところ、脱獄連合内で謙戯の噂で持ちきりだったからだ。

やれ悪魔だ、やれ天使だ、あの男は化け物だとか、そんな話を聞いた風子は居ても立ってもいられず、すぐさま謙戯のもとに駆けつ

けたというわけである。

彼女は早速謙戯にそれについて質問をするが、まずは俺の質問に答えるという謙戯の条件に答えた。

次に、風子が謙戯に質問をする番であった。

「あの、みなさんが貴方について色々言っているんですけど……ものすごく強かったサイボーグみたいな人を撃退させるほど強いって、本当ですか？」

「んなまさか、彼らはきつと人間違いしているのさ」
当然のように謙戯は嘘を吐いた。

「どうして嘘吐くんです。私は貴方が凄いなあって尊敬の眼差しを送っているんですよ」

「尊敬も眼差しも要らないよ。俺はただ、この組織に少しばかり興味があるだけで、別に英雄気取りを見せびらかしに来たわけじゃないんだぜ」

「だったら、脱獄連合のどこに興味を持ったんです？」

その問いに、謙戯は答える。

「いやあ、言っちゃっていいのかな」

「ええ、言っちゃって下さい」

「俺結構ひどい事言うよ？」

「別に構いません」

「お前ら、俺を殺そうとしていただろ。だからさ」

謙戯の言葉に、風子はもちろん、彼らの会話に耳を傾けていた脱獄連合のメンバー全員が、顔を青ざめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8258y/>

異世界に來たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

2011年12月26日21時49分発行